

874 常盤木の緑も今はひと年のくるゝ色とやうつむしらゆき

同じ御題の中に 雪与歳深

875 降つゝく雪も日かすもつもりきて名残そふかき年の暮方

876 ふりうつむ宿はいくへの雪の中にくれ行年や身につもるらむ

老て後 年の暮に雪の降ける時

877 行年のなこりも深くふる雪の白かみすてに身は老にけり

878 あはれわかかしの髪もしら雪のふりまさりつゝ年の暮行ゆる

関歳暮

879 あけは又立帰る春に逢坂の関のよのまに年そくれゆく

河歳暮

880 年波の立もかへらぬ早瀬川よとむとなしにくれゆくはうし

老後歳暮

881 老か身は猶にしたはるれ月も日もあたに数そふ年のなこりをは

六十三の齡に成ける年の暮によめる

882 老の波かけてふり行年はうしわか身むそしに三つの濱松

飛鳥井家月次御題に 歳暮祝

883 春をまつこゝろの花のみやこ人ゆたけき年の暮いはふらむ

884 ゆく年の暮そにきはふ程さに身のいとなみもゆたかなる世は

同じ御題に 寄歳暮祝

885 戸さしなき世にあふ坂の関路とや年もゆたかにこえて行らん

886 君か代の数もかさなる年ことにかはらぬ今日のくれそにきはふ

「
(ウ)

887

除夜

いか、せんあたにくらせる一年の一夜はかりにかきるなこりを

「
(66・オ)

「
(ウ)

「
(ウ)

「
(裏表紙)

狩場霰

851 みかり野のあられ吹まく山かせに乱れてきほふ矢さけひの聲

852 矢さけひの聲もきをひてものゝふのかり場の霰風さはくなり

高城住吉社に百首哥奉りける時 豊明節會

853 雲の上にけふそ立まふ乙女子かむかしにかへす袖のからたま

神楽

854 神垣にうたふ聲さへふくるよの空にそすめるあかほしの影

飛岡天神宮奉納哥中に 夜神楽

855 ふかきよのもりの榊葉折かへしうたふ聲さへ霜にさゆらむ
「ウ」

椎

856 冬枯に残る岡辺の椎柴もしゐてあらしの何はらふらむ

百首歌よみける中に 薪

857 雪の中はしつか爪木の道をなみかこひの真柴折てたくらむ

炭竈

858 なけきこる身をやわふらん奥山の炭やく烟はれぬおもひに

炭竈烟

859 立のはるけふりやしるへしら雪のうつむはふかき炭かまの山

衾

860 霜氷さえとをるよのふすまこそかさねぬ人の上につられ

爐火

861 打むかふ心もとけて春の夜の夢やむすはんねやのうつみ火

爐火似春

862 花鳥もおもひ出つゝのとかなる春をこゝろのうつみ火のもと

飛鳥井家月次御題に 雪中埋火

863 閨の上はふりそふ雪もうつみ火のあたりの春にとけんとやする

864 ふる雪はうつむもしらす埋火にねやの中なる春を覚えて

佛名

865 ひと年のまよひの夢やさますらん三世の佛の名をとふ聲

早梅

866 年寒き雪のふるえの梅花春よりさきの春や見すらむ

飛鳥井家月次御題に 歳内梅

867 梅のはな咲そふ雪の中垣に間近き春やさそ急くらん

同じ御題の中に 歳内鶯

868 しら雪のふる年なから鳴そめてこゑや花なる枝のうくひす

869 冬ふかきみ谷の雪に打はふき春をならすや鶯のこゑ
「ウ」

歳暮

870 おとろくもかひなきけふの暮なれや身のひとゝせは夢のまにして

871 過ゆくはよそに思ひし月も日も身につもりてそ年の暮ぬる

惜歳暮

872 年ことにおしみ馴ぬるけふの暮老てやいとゝなこりそふらむ

飛鳥井家月次御題に 歳暮雪

873 野も山もわかつてうもるゝ雪の中はいづくに年のくれて行らん

古寺雪

はつせ山嶺も檜原もうつもれて雪よりも、入相の聲

かねのおとはをくれてあくる初瀬山はやくもしらむ雪の光に

故郷雪

ふりにける志賀の都も今更に春をうつすや雪の花その

山家雪

はつ雪のつもるもしらし白雲のふかき山路はとふ友もなし

みやこ人しくるとや見んしら雪のうつめる軒も雲ふかき山

あやめ田の山莊にて 雪の降ける時讀ける哥の中に

ふりそむるけさの山路のたえぬまは雪に契りし人そまたる、

音つる、人こそなけれ雪の中に軒のかけひの水も氷りて

とちれこし花よ月よの友たにも雪にたえたる山のした道

おなしき折友とちの訪らひ来りければ

とふ友の帰る道なくつもれかしひとよと、めん雪の山陰

閑居雪

かきわけて誰かはとはん浅茅生の雪も友まつくれの庭

心からはらはぬ宿の八重葎猶とちそひてつもるしらゆき

樵路雪

花にこそしはしやすらへしは人の雪にはいそく山の夕かけ

庭雪

かよひ路はまたうつもれぬ薄雪の友まつ庭を人もとへかし

庭の雪のいたくつもりけるあしたに

ふく風のちらすはおしきあした哉木々に花さくしら雪の庭

竹雪深

呉竹のよのまや深くつもるらんあけ行窓の雪のしたおれ

松雪

吹拂ふ風のちからもやま、つにあらそひかねてつもるしら雪

飛鳥井家月次御題に 雪中見松

浪の上は積るともなき雪の日にひとむら白き志賀の濱松

松か枝のみとりさかふる葉をしけみつもれる色も深き白ゆき

雪中鳥

山松の風は雪にうつもれてねくらのからす聲さはくなり

池水のふかくも氷る雪の中に猶下く、る鳩のかよひ路

雪中獣

こえわふるあおともふけてゆく駒の鈴鹿の山にふれるしら雪

雪中望

ゆたかなる年の光もあらはれてよにもつもれる雪そくもらぬ

たなひける雲にすそ野はうつもれて空にそつもの富士の白雪

雪中鷹狩

たか人もわけまよふらしみかりの、雪にかくる、鳥のおち草

鷹狩日暮

同じ野にあすもきて見ん狩衣あかぬ鳥立はけふくれぬとも

「
(62・オ)

「
(ウ)

(63・オ)

- 802 けさはまたふりもつゝかて砌なる草のはつかにつもるうすゆき
 803 真砂地にをきそふ霜と見るはかり初雪うすし明ほの、庭
 住吉社奉納哥に 積雪
 804 日にそひてつもるやいくへ八重葎はらはぬ上の庭のしらゆき
 飛岡天神宮奉納哥の中に 連日雪
 805 まつ人のとはぬ日数も積りきてふみわけかたき庭のしら雪
 雪朝
 806 山鳥の尾上にしらむけさの雪長き夜のまにふりつもるらし
 雪のいたう降つもりけるあしたによめる
 807 分かよふ音もさやかにしら雪のつもる大路そ今朝はしつけき
 夕雪
 808 雪つもる外山の松の夕からすなれしねくらやとひわふる聲
 或夜 雪のいさゝかふりける時
 809 月影も霞むはかりの薄曇打ちる雪や花と見ゆらむ
 山雪
 810 夜の程はしくれし山の雲間より雪のひかりそ明はなれゆく
 811 黒髪山の名さへもうつもれつけさしら雪におもかはりして
 山路雪
 812 よの程につもる山路の雪深み朝ゆく鹿や分まよふらむ
 峯雪
 813 雪の中にうつもれてこそ山の名もあらはれにけれこしのしらねは

(60・オ)

(ウ)

- 814 朝とくも先たつ人の跡とめて雪にまよはぬ岡こえの道
 岡雪
 815 はし鷹をすへ野の原のかり衣はらふにたへぬ袖のしらゆき
 816 わけ迷ふ袖さむからし旅人のかちの、原にふれるしら雪
 杜雪
 817 神のますもりの梢の朝風にみたれてかゝるゆきのしらゆふ
 関雪
 818 たひ人も越やわつらふ雪の中にすゝまぬ駒の足からの関
 819 あけぬれと朝たつ人の跡もなし戸させる雪の白河の関
 河雪
 820 ふもと川つもるもしらぬみなかみの雪さしくたす浪のいかたし
 海邊雪
 821 みなと江やつなける船のかすゝに汀もわかすつもるしらゆき
 822 雲はるゝゆふへの浪にひと村のうかへる雪や沖のとを島
 浦雪
 823 沖津かせさゆる浦輪の真砂地によせてかへらぬ雪の白浪
 濱雪
 824 入江なる尾花は霜に枯ふして雪の波こすまの、濱かせ
 磯雪
 825 塩風に雪そちりかふあらいその岩こす浪の色もみたれて

(61・オ)

(ウ)

飛鳥井家御題に 寒夜と云事を

778 　むすふへき夢こそなけれ床の霜枕のこほりさえあかす夜は

779 　真砂地は霜をかさねてさゆるよの空にも氷る冬の月かけ

冬月

780 　まさこ地に夏さへ霜と見し月の光もこほる冬かれの庭

781 　冬夜の長きによとむあまの河水るか月の影も流れす

山冬月

782 　紅葉、は残らぬ山の冬かれに月の桂の色そつれなき

野冬月

783 　秋に見し露のやとりはかれはて、冬野の霜に氷る月かけ

冬月

784 　さえさゆる色^{光はいつれ}をかさねて池水の氷の上に氷る月^{夜の}かけ

寒月

785 　あかてとふ月も寒けし冬夜の長きを送る袖^{かこつ}のつらゝに

786 　やとりきてふけ行月も影寒し枕の氷袖の霜夜に

飛鳥井家月次御題に 霜月

787 　さゆるよの影より霜やむすふらんふけて身にしむ袖の上の月

788 　このはちる嵐もたえてふくるよの霜を光にさゆる月かけ

「
(59・オ)

789 　さやかなる光は秋の空よりもこほる霜夜の月そ身にしむ

霰

790 　末葉までくたくるはかりはけしくも霰みたる、庭の玉さ、

791 　木からしに残る軒端のならの葉もくたく霰の音のはけしさ

聞霰

792 　ねやの上にふるははけしき玉霰たまらぬ音に夢も碎けて

霰破夢

793 　き、馴し軒の落葉の音かへてあられに夜半の夢そくたくる

飛鳥井家月次御題に 霰

794 　雲かゝるいこまのたけの雪もよに外山の里はみそれふるなり

同じ御題の中に 待雪

795 　降そむるよその高ねのしら雪をいつかみやこに待得ても見ん

796 　とふ友を契りし庭にふる雪のつもらん程そけふはまたる、 「
(ウ)

初雪

797 　まさこ地はつもり^{ぬるほどはあらしの}もや^{ヒヒヒヒ}らて 空にのみまつ降^{ちり}そむる^{ヒヒヒヒ}けさの白雪

庭初雪

798 　庭の面にけさめつらしく降そめつ昨日はよそにみねのしら雪

799 　きのふまで山のはつかに見し色をけさ分そむるはつ雪の庭

初雪のいさゝかふりて朝とく消方に成ければ 楠田淡

水に申つかはしける

800 　とふ友を待へきけさの程たにもつもらておしき庭の初雪

かへし

兼廉

801 　はつ雪はよし浅くともとふ友をまつとはふかき人の言の葉

浅雪

- 754 和哥の浦のふけ行夜半に鳴千鳥身をこそわふれ友なしにして
河千鳥
- 755 夜深くもなくや涙の河ちとり思ひの測に妻をこふらむ
海邊千鳥
- 756 舟とむる夜半の寐覚の友千鳥枕の浪に浦つたふこゑ
飛岡天神宮奉納哥に 浦千鳥
- 757 あま人の塩くむ袖の浦ちとりつはさも浪にぬれて鳴らん
島千鳥
- 758 ねになくや新嶋もりの友千鳥あるよもなみの月にうらみて
百首哥よみける中に 泻千鳥
- 759 遠さかる浪のひかたの汐風にむれて千鳥の聲そ満くる
水鳥
- 760 とけてねぬ池の夜床やつらからん氷よりたつ水鳥のこゑ
霜こほる芦間の床に打はふきねぬやわふる池のみつ鳥
- 761 寒夜水鳥
- 762 夜寒なる池のつら、のうき枕うき独ねにをしのなくらむ
池水鳥
- 763 月もさそやとりかぬらん水鳥のさはけはさはく池のさ、波
池水の氷る夜床に芦鴨の浪のまくらも定めかぬらん
- 764 飛鳥井家月次御題に 鴨
- 765 冬かる、入江の芦のよをさむみ鴨の青羽も霜やをくらむ

「
(ウ)「
(57・オ)

- 766 水の上に浮てねをなく芦鴨のあしのいとなき世を渡るらん
池鴨
- 767 くれなるの木葉ちりしく池水にかもの青は^{はへある}や色をそ^ビふらん^ビ
網代
- 768 橋姫の身をうち川のあしろもりねぬよの床にひをや待らん
あしろもる川瀬のひをのよるく^{ママ}に思ひももえてか、りさすらん
飛岡井家月次御題の中に 氷
- 769 山川の流を冬はせきとめて氷るも水のこゝろなるらし
木葉にもよとむにやすき山みつは氷のあせきとちかさぬらん
- 770 氷始結
- 771 行なやむいはまをせはみ谷川のみなかみよりや氷そむらむ
瀧水
- 772 冬ふかくこほり果ては瀧浪もさそ音なしの名にひ、くらん
河水
- 773 早き瀬はむすひもやらて山川の淀に氷の測やせくらむ
高城住吉社奉納哥に 池氷
- 774 此頃のをしの契よいかならん夜床もかれてこほる池水
飛鳥井家月次御題の中に 氷満池
- 775 きしねより深くそむすふひも鏡みかくひかりも廣沢の池
掛樋氷
- 776 山水のものと岩間やとちつらん氷るにはやき庭のかけひは
- 777

「
(58・オ)

川落葉

730 くれなゐの錦の波のたつ田川嶺の木葉に風渡るらし

窓落葉

731 入日かけもりくる窓の夕風にさそふ木葉の音そしくる、

732 むら雨の風に窓うつ音はして軒の落葉に月そくもらぬ

庭落葉

733 さそひくる風の庭に散しきて木末もしらぬよその紅葉、

734 いくより風の庭にさそひきてこすゑもしらすつもる紅葉、
ヒビヒビ

木枯

735 落葉せし後も外山に聲たて、枝吹しほることからの風

寒松

736 秋の色はうつろふ山の霜枯に残るみさほのまつそこたかき

朝霜

737 なひきふすかれふの薄むすほ、れ垣根に深きけさの朝霜

飛鳥井家月次御題に 枯野朝霜

738 見し秋の哀そ残る朝霜の色を花野の冬かれのころ

夜霜

739 ふかきよの月も身にしむ色そへて拂ふにたへぬ霜のさむしろ

松上霜

740 すむ鶴もふけてねられぬ聲寒し松の上葉の霜白き夜に

竹霜

「
(ウ)

741 打なひく竹の末葉のほのくと霜よりしらむ窓のあけ方

飛鳥井家御題の中に 殘菊

742 百草はや、冬かる、ませの内も霜に色そふしらきくのはな

743 冬枯の垣ねはさひししら菊の残る色香も霜にかしけて

同じ御題の中に 寒草

744 ふく風の音にや秋を残すらん霜かれはつる庭の荻はら

745 秋かせのなれしやとりもかれくに音つれかはる霜の下荻

野寒草

746 虫のねもかれゆく野への花薄ほのかに残る色そさひしき

庭寒草

747 をく霜の色をひとつの垣根哉花の千種の冬かれの庭

寒蘆

748 ともねする夜床もあれんをし鳥のすかたの池の芦の霜枯
ヒビヒビ

749 霜こほる汀の芦のしほれ葉にうらふく風も音そかれゆく

千鳥

750 小夜千鳥ねられぬ床の浦浪に思ひくたけて妻やとふらむ

夕千鳥

751 みつ汐の入江の芦のうら風にゆふ浪千鳥みたれてそよる

752 夕塩に聲も満くる濱千鳥けふりのなみに又きえてゆく

深夜千鳥

753 寒る夜もいと、ふけぬのうらさひて友なし千鳥ねをのみぞ鳴
ヒビ

「
(ウ)

冬之部

初冬風

708 一葉ちる秋の聲には吹かへてけさより冬の風のはけしさ

飛岡天神宮奉納歌中に 初冬時雨

709 ふく風も寒き朝けの初時雨空にや冬をさそひきぬらん

百首歌よみける時 同し心を

710 冬の来るけしきを見せて山端に朝ある雲や時雨そむらん

飛鳥井家月次御題に 神無月

711 ふく風もはけしくなりぬ神無月木々の落葉も空にしくれて

712 袖の上もしくれ初けりかみな月ふりてゆく身を思ふ寐覚に

時雨雲

713 そことなくさそはれ渡る浮雲は風をこ、□にしくれてやゆく」

(54・オ)

夕時雨

714 はれてゆく雲のはたてのくりかへし又夕暮の空そしくる、

715 夕日影さすや高ねの雲間より時雨を渡す虹のかけ橋

夜時雨

716 くもるかともれは晴ゆく小夜時雨軒の雫に月を残して

時雨のたひく降ける夜 月を見て

717 袖の上にもるやいつれと定まらず時雨にまじる軒の月かけ

飛鳥井家月次御題の中に 連夜時雨

718 袖ぬらす身のならはしにやなくの寐覚を時としくれきぬらん

野時雨

719 むら時雨はれゆく野路の日影にはたか袖笠やぬれてほすらん

里時雨

720 小夜しくれ方も定めす音つれていく里人の夢さそふらむ

「ウ

721 久しくやみふしける比 寐覚に時雨のふるをき、て

過にけりねさめの空のさよ時雨物おもふ袖に露を残して

722 わひ人の宿にはよきよ小夜しくれね覚の袖の濡そふもうし

神無月はかりいさ、か思ふ事の侍りける時

723 定めなき世を思ひねのよるの袖いくたひぬらす時雨なるらん

724 なみたさへさそはれにけり霜枯のもろき木葉にあらしく頃

冬の初つ方 あやめ田の山莊の庭に散残れる紅葉の

ひと枝を折て 増水氏輔に添て遣はしける

725 ちり残るもみちの色に山里の秋より後のあはれをもとへ

落葉

726 枝よりはさそひつくして木のもとのつもる落葉にさほく山かせ

727 緑なる苔のむしろも埋れて紅葉をしける庭のやま陰

落葉混雨

728 今は又ふりそふ色のくれなるに時雨を□る木葉とも見ん

「(55・オ)

夜落葉

729 月かけのはる、軒端に音たて、このはしくる、よるの山かせ

山紅葉

687 妻こひに鹿なく山の紅葉、は深き思ひの色にそむらむ
 688 聲^{音に}たて、鹿も時しる常盤山このはや秋の色にいつらむ

飛岡天神宮奉納哥に 同し心を

689 もみち葉のいつくはあれと立田姫名におふ山やわきて染らむ

百首歌よみける中に 杜紅葉

690 めつらしく心やそめんはつしほに浅きは、そのもりの紅葉、

川紅葉

691 河岸にそむるは深し紅葉、の下ゆく水も色かはるまで

紅葉出牆

692 日^{染いたすえたのもみち}にさらすたか袖垣^{たか袖垣}のから錦^{たか}そむる紅^{垣に}の^かは^{けに}へ^はた^{らん}てす

飛鳥井家月次御題に 紅葉間松

693 露霜のそめぬ緑も色そ、ふ紅葉にまじる岡の邊の松

同し御題の中に 遠樹紅

694 秋の色に染るはつたのもみち哉しくる、頃のをちの山松
 695 とを山のみとりも深きこのまより秋の色わく枝の紅葉、

あやめ田の山莊の紅葉見給はんとて

君のいらせたまひける時

696 山陰の紅葉もけふは色そ、ふ深きめくみの露を待えて

君ある奥山に登らせ給ひて紅葉を御覽せしとて

697 露霜も深き山路の秋の色に錦をそむる木々の紅葉、

—
(52・オ)

といへる御歌を賜はりしかは 御かたはらまで讀て奉りける

698 いく千入染し山路の秋よりも深き言葉の色や仰かん

或所の紅葉の一枝を折て 増水氏輔に遣はすとて

699 手折こした、ひと枝の紅葉さも心の色は深きとをしれ

返し 氏輔

700 ひと枝の紅葉の錦をる人の心の色そまさるとも見ん

暮秋

701 したふその方もわかれすもみちはのちりのまかひに秋そくれゆく

702 おしめとも今はいく夜か有明の月も程なき秋のわかれ路

暮秋風

703 くれてゆく秋はかたみもとめしとや木葉をさそふもの山風

暮秋露

704 ゆく秋のなこりも今はかれ／＼の草のはつかにをけるゆふ露

住吉社奉納哥の中に 九月盡

705 うしとてもなかめはすてし夕くれの空や限の秋のわかれ路

閏九月尽によめる

706 さらに又おしむは同しなこり哉ふた、ひくる、秋の日数を

707 長月の長き日かすを重ねてもくる、名残のおしからぬかは

—
(ウ)

—
(53・オ)

—
(ウ)

九月九日に

君の国香亭といへるに人を召て 韻をたまひ詩つくり

歌よませ絵へりける時 東韻を探り得て

けふことに色香をそへてさく菊もさかふる宿の千世の秋風

閏九月九日に菊花の咲るを見て

咲残るまかきの菊の花の色もけふやふたゝひ名に匂ふらん

飛鳥井家月次御題に 白菊

ませの内の色の千種はうつろひてひとり栄ふる白菊のはな

咲にはふ庭のまかきの朝夕に色そふ霜のしら菊の花

庭なる菊の花に月の移りけるを見て

移りくる籬の菊の色々に^{なめ}光もかはる花の上の月^{かけ}

菊露

かすくに花の光やみかくらん朝をく露の玉のむらきく

水邊菊

河岸に咲そふ菊の下水は花やちとせの測をせくらむ

うつし見る影も老せぬしら菊の千世の鏡や花のした水

籬菊

さく花のちらてさかふるませの中にちよをこめたる庭のしら菊

或人の山陰に菊の花つまんとてまかりけるを聞て よみ

てつかはしける

つむ袖はうつす色香も深からん山路のきくに千世を契りて

「
(50・オ)

禁裡に用ひ給へりし菊のきせ綿也とて 花の一枝に

そへて楠田兼廉の許より贈られける時 よみてつか

はしける

花の色もかれせぬ菊にきせわたのあつき恵は千世も仰かん

飛鳥井家月次御題に 對菊惜秋と云事を

うつろはぬ色香なからも白菊の花にくれ行秋やおしまん

行秋のなこりをそ思ふ白菊の千年□ちらぬ花のまかきに

同じき御題に 柞

の□染るは、その紅葉、もまためつらしき秋のはつしほ

秋ふかくそむらん比の柞原浅きを色のかきりとも見ん

同じく 薦

隙もなくしくる、山のつたかつらくりかへしてや千入染らん

紅葉

露霜のいかに染てか常盤木の中に色わくもみちなるらむ

みね高き紅葉にはれよ夕時雨染るちしほの限りをも見ん

飛鳥井家御題の中に 黄葉

から錦また下染のはつしほにき、の紅葉も色浅きころ

雨後紅葉

峯はる、時雨の跡の夕日影木さの錦やそめてほすらむ

夕紅葉

入日かけ染るこのはの紅るは春見し花にまさるゆふはへ

「
(ウ)

「
(51・オ)

- 642 嶺初鴈
分のほる雲間の月にさそはれて同し嶺こすはつ鴈のかけ
- 643 田鴈
鳴渡る方も定めす小山田のひたにみたるゝかりのひとつら
- 644 朝霧
爰かしこあくるたかねのあらはれて霧のひまゝのほる日の影
- 645 山霧
朝風はや、吹わくる霧の中にたゆると見れはつゝく山のは
- 646 百首哥の中に 関霧
こえわふる関路も遠し足からの八重山深き霧の戸さしに
- 647 河上霧
ゆく水の烟も深く立こめて霧の底なるをちの川おと
- 648 擣衣
秋寒き夜半のきぬたの聲さによその哀をかそへてそきく
- 649 里人のねぬよしらるゝから衣あかつきかけて打もたゆまず
- 650 住吉社奉納哥中に 聞擣衣
- 651 よそにきく袖も露けし唐衣うらみてたれか夜半に打らん
- 652 擣衣幽
残る夜の月に哀を打そへてよそのきぬたのほかなる聲
- 653 打あかす音も身にしむさよ衣餘所の寐覚のうさをかさねて
- 654 衣擣衣
わひ人の独か為に長き夜を秋にうらみて衣うつらむ
- 655 月にうつひゝきも寒し初霜のふるさと人の夜半のさころも
- 656 海邊擣衣
あま衣ころもよさむの秋風に身をうら浪の打しきること
- 657 里擣衣
てる月の桂の里の小夜碓ひゝきも空にすみのほるらし
- 658 秋深きときはの里のときは今夜寒なりとや衣うつらむ
- 659 飛鳥井家月次御題に 野分
移しうへし心の花もしほれけり野分吹しく庭の百草
- 660 いたつらによるの錦やくたくらん庭の真萩に野分たつ聲
- 661 八月の半はかりに野分いといたうはけしかりける時
- 662 しほれ行民の草葉のいかならん田面の稲に野分ふくころ
- 663 民草も心みたるゝ千町田のいな葉くたけてのわき吹なり
- 664 嵐
草木よりやかてしほるゝ心かなふり行宿の野分ふく夜は
- 665 葛
露霜のをかへのまくつ秋ふけてうらみによはる色も寒けし
- 666 百首歌の中に 重陽宴
秋ことに花も色そふ今日ならん世々のためしときくの盃

619 山寺にすむとはすれと濁江のうきになれこし月そかはらぬ

山家月

620 山里もこゝろつくしの秋そとはこのまの月をなかめてそしる

あやめ田の山莊にて月のあかゝりける夜

621 月も猶心とすめる山路かなうき世のちりをはらふ風に

622 さひしさをとひくる月の影ならて誰をかまたんまつの下庵

同じ山莊に月見んとて友とちの訪らひ来りければ

623 契り置ぬ人もとひくる山里は月やゆふへのあるしなるらん

田家月

624 をしなく岡へのわさ田もる庵にねぬよとひきて月もすむらん

閑居月

625 月もさそやとりやわひん八重葎しける庭の陰ふかくして

百首哥の中に 庭月

626 はらはしなしける庭の蓬生も露の宿とふ月に契りて

月十三首哥の中に 月前萩

627 袖の月猶身にしみてすめるよの光を送る萩の上かせ

重出
月前竹

628 風そよぐ
くれ竹の小枝をわけてもる月の光もなひく軒の秋かせ

月前松

629 澄のはる光は空にうつろひて尾上の松に月そいさよふ

月前舟

「
(ウ)

「
(47・オ)

630 所から月のあかしの浦浪にねぬよしらるゝあまの釣舟

月前遠情

631 てる月にさそはれ渡るこゝろ哉姥捨山の秋はいかにと

寐覚月

632 あはれとも月やとふらん深夜のたもと露けき老のねさめを

對月憶昔

633 かきくもる心はうしやこし方の秋のむかしを月におほえて

月催涙

634 かすくの秋のあはれをさそひ来て涙すゝむる袖の月かけ

月歌の中に

635 なれくし月のやとりも今はとて袖に別るゝありあけの影

惜月

636 ふけて行わかよの秋のなこりまで傾ふく月にそへて惜まん

637 見る影もやゝすくなるよなくゝに名残そひ行有明の月

住吉社奉納哥の中に 初鴈

638 露霜の夜さむの衣かりかねは越路の雪やわひてきつらん

暁初鴈

639 玉章をたかまつ方に急きてやあかつきかけて鴈の来ぬらむ

暮天鴈

640 空遠くいまた旅なるたくれはいづくに宿をかりのなくらむ

641 物おもふゆふへの空になく鴈のなみたや袖の上に露けき

「
(48・オ)

596
ゆく月もしはしやとりて逢坂の関の清水に影とゝむらん

関屋月

597 関の戸もあけぬと見えてさやかなる月にそらねを鳥も鳴らん

橋月

すみ渡る影をうつしてゆく水に月の上こすよるの川はし

河月

霧はるゝ山の嵐に大井河水音たかくすめる月かけ

たえくに流るゝ水のうき霧も月にかけしと拂ふ河かせ

自哥の中に

601
すめるよの月は高雄の山かせにひかりをちらす清瀧の浪

瀧月

602

落瀬津
やとりきて乱るゝ瀧のしら糸に月の光もくりかへすらむ

ヒ
ヒ
ヒ
ヒ
ヒ
ヒ
ヒ
ヒ

百首歌の中に
渡月

603
みなれ棹さすかいとなき身のうさも月に忘れよ夜の川長

同じ歌の中に
湖月

さゝ波や海ふく風も色見えて鴟てる月の影そすみゆく

海月

605
山のはのさ^{つらさ}は^つりもみえぬ沖津浪千里を^{すめる}かけて月^月すみ渡^{かけ}る

わたつ海の浪路の末も雲消て戸渡る月にすめる秋風

607
 てる月も猶いさきよしさゝ波や塩ならぬ海に影をひたして

海上月

やとりきて月も氷を敷妙の床のうら浪よるそしつけき

浦月

須磨あかし名におふ秋の浦路まで心は月にうかれてやゆく

610
もしほやく烟もつらきいとなみを月にわふらんすまの浦人

飛鳥井家月次御題に
須磨浦月

あまの子の心も須まのうら浪に月よゝしとやもしほくむらん

磯月

612
影るまはやとすあらいそ浪にのかすすむく月のに月も岩影こすよるのしほかせ

都月

君かすむ都のそらのいく千秋月も世に似ぬ光そふらむ

くもりなき世々のためしと仰くらん誰もみやこの月の光を

九月十三夜 月十三首歌の中に 花洛月

曇りなき光を花のみやこ人心も月にすみ増るらむ

故鄉月

616
ふりにける吉野の里にすむ月はしるや雲井の秋の昔を

古寺月

露霜の世々にふりぬる山寺は月もいく秋すみ馴ぬらむ

楠田何かし或山寺に住ける頃
月いとあか、りける

ゆふへに申つかはしける

心から澄まさるらん山寺の秋しつかなる月のゆふへは

かへし

兼廉

そへてつかはしける

名にしおふ月にみかきて言の葉の露も玉なす光をそ見る
ちりの世を逃れし宿の秋風にさそな心の月はすみよき

九月十三夜

秋津洲の秋のふたよの名に高き月はいつくもさそ仰くらん

閏九月十三夜 月のいとくまなかりければ

こゝろからすみ増りけり一とせにふたよ名におふ長月のかけ
ひと、せにふたゝひすめる長月のかけもかはらす名に高き空

九月十三夜 或山寺に月見にまかりける時

山寺におりちらしたるしら菊もこよひ色そふ長月のかけ

深夜月

里人もしつまりはてゝふくる夜は物にまきれす匂ふ月かけ
あくかるゝ心もいとゝ深きよの月と共にやすみまさるらむ

飛鳥井家月次御題之中 有明月

秋夜の長きおもひをなくさめて寐覚の空に有明の月

山のはのつらさは見えぬ月影もしらむに惜き有あけの空

同じ御題の中に 毎夜明月

よなくゝにおもひくまなき友そとや馴ゆく月の照まさるかけ
空の色もやゝすみ増る夜なくゝの月にや秋の光そふらん

九月十三夜に十三首歌よみける中に 月前星

名にしおふ月に光をゆつりてや曇らぬ空の星そ稀なる

月前風

ちりをたに猶残さしと澄るよの空ゆく月に秋かせそ吹

月前時雨

定めなきしくれの雲の中空にくもと見れははるゝ月影

雨後月

むら雨のなこりの露の玉さゝにみかきてやとるよはの月影

雲間月

山端のこのまをもれてゆく月も心のくまやうき雲の空

村雲のはれてはくもる夜半の月まつもおしむも定なき空

月出山

まつ程もしはしはすきて山のはの夕る雲を出る月かけ

山月

雲霧は立もおよはぬふしのねの嵐の上にすめる月かけ

ますかゝみかけて曇らぬ山鳥の尾上の月のさし昇る影

野月

はてしなき露より露に宿りきて長き夜あかぬむさしのゝ月

なく聲も澄まさりけり小男鹿の妻とふ野へのよはの月影

高城住吉社に百首歌奉りける時 同じ心を

影やとす露分衣はるゝと遠里小野の月にあかさん

関月

たひ人は夜半にやこえん関の戸もあくるはかりの月の光に

「
(44・オ)

「
(ウ)

「
(45・オ)

- 546 むそとせの餘り露けき袂かなうきは昔の秋のゆふくれ
 547 なく虫も萩ふく風も身ひとつに秋のゆふへのうさや告らん
 飛鳥井家月次御題に 秋夜長
 548 身のうさも秋の寐覚に数そひて明やらぬ夜の長月の空
 549 ねや近く鳴よる虫も秋夜の長きおもひやとひあかすらん
 同じ御題の中に 秋霜
 550 本ゆひにおとろかれぬる秋の霜はやくはいかてむすひそむらん
 551 いつよりかか、みの影に急くらんなれぬむそしの秋のはつ霜
 高城住吉社奉納哥の中に 秋田
 552 住の江の松よりかけてきし田なる稲の穂なみを渡る秋かせ
 秋の田面を見やりてよめる
 553 いはりさす山田のをしね刈しほに色つきわたる秋のむら雨
 稲妻
 554 月遅きたかねの雲のたえまより光ほのめくよひのいな妻
 飛鳥井家御題の中に はつき
 555 わきて猶秋のなかはを盛とやはつきの影の^{てり}に^まひ^さふらん
 556 いつはあれとはつきを月の時そとや光もいと、すみ増る空
 待月
 557 雲霧は拂ひつくしてくる、よの月まつ空に^ますめる秋かせ
 秋哥の中に
 558 月かけは猶出やらぬ山のはの雲にまたる、霄の秋風

- 559 身のうさも思ひはるけて見る月はあかて幾秋^毎おも馴ぬらん
 飛鳥井家月次御題に 馴月
 560 あかなくにこと、ひなる、友なれやむそし餘りの秋のよの月
 561 老となるつらさもいはし秋ことに馴行月をめつるこ、ろは
 八月十五夜
 562 芦原の中津国なる中空に秋も最中とすめる月かけ
 563 八月十五夜の空に雲立おほひて月の晴さりければ
 564 定めなくた、よふ空のうき雲に月は最中の名こそかくれね
 名にしおふ秋の光もはれやらぬ世はうき雲の中空の月
 十五夜の夜半はかりに月の蝕しける時
 565 秋も今なかはの空のうき雲に月の盛やあたにすぎなん
 566 浮雲のさはりもたえてなか空にかくるは^をおし^むや望月の影
 567 なに事も満るはかたきことはりを最中の月にかこちてそ見る
 十五夜にこ、ちわつらひてこもりぬける時
 568 露わけてたれかはとはんもち月の光もくもる朝茅生の庭
 楠田兼廉の許より八月十五夜の月見ける事共よろつ
 かきしるせしふみの奥に 兼廉
 569 名も高き月の桂に言の葉の露の光やてりそひぬらん
 570 いつはあれと猶もことしは逃れこし心にすめる月のさやけさ
 となん申贈りければ 其かへりこと申ける文の奥にかく書
 (ウ)

524 小男鹿の妻とふ野への花薄ほにあらはれてなきそむるこゑ

月前鹿

525 なく鹿の聲も数そふ^{くろよ}け方の月にやまさるおもひなるらむ

安山親敬か長月の月あか^ヒりける夜 或山里に鹿の音

きかんとてまかりけると聞て あけの日申遣はしける

526 おもひやる心さへこそすみにけれみ山の月にさをしかの聲

527 山里のねさめの月に鹿なきて秋の哀のかきりをやしる

返し

親敬

528 おもひやる心もさそなすみぬらん月に鹿なくみ山への秋

529 思ふにもいふにもまさる哀かな月すむ山の小男鹿のこゑ

同じき折 夜ふけて鹿のなかすなりければとて

なきぬへき太山の鹿はつれなくて など親敬申贈り

しかは かくよみてつかはしける

530 奥山にあはれをそふる鹿の音の聞えぬ夜半も又やさひしき

暁鹿

531 ねにたて、うき暁となく鹿^はや妻にあふよの別なるらむ

夜鹿

532 さをしかの音になく山のさねかつらくるよもしらぬ妻をこふらし

┌
(41・オ)

533 秋風も身にしむ夜半に妻こひの恨をそへて鹿やなくらん

534 山鳥の尾上の鹿も長き夜に心へたつる妻やこふらむ

山鹿

535 つれもなき妻はいは木を心とやみ山の鹿のわひて鳴らむ

野鹿

536 なく鹿の妻とふ夜半はとふ火野の野守も秋のあはれしるらむ

537 妻こふる野への真葛の秋風^をに身をうらみてや鹿のなくらん

海邊鹿

538 ふくるよの沖^浦こく船に聞ゆなりいそ山^{すまのうへ}深きさをしかのこゑ

田家鹿

539 山田もるしつも驚く夜半ならん鳴子になる、小男鹿の聲

540 なく鹿も今はいほりに立馴て小田もるしつかね覺をやとふ

鶉

541 うらかる、草葉の床のはつ霜を月にうらみてうつらなく也

野鶉

542 月ふくるうつらの床の露霜になくねもさむし野への秋風

澤鶉

543 ふくるよの沢邊の月にふしわひて鳴のはねかき^すかきやそふらん

百首歌よみける中に 秋夕

544 物おもふたかならはしそ秋といへはつらさに限るゆふへならしを

秋夕情

545 老ぬれは秋の心の愁までゆふへをわきて身にやそふらむ

秋の夕にいさ、か思ふ事の侍りける時

┌
(ウ)

楠田何某秋の野の花見にまかりけるととき、て あけの

あしたよみてつかはしける

501 色も香もあかてやうつす狩衣わくる千草の秋の花野は

右の楠田氏の許に人くをつとへて 秋草の色をあまた

の花かめにさせりけるを見てよめる

502 かめにさす色の千種のさまく人にのこゝろの花も見えけり

飛鳥井家月次御題に 露

503 立田姫たえぬ思ひの数々に朝ゆふ露やみたれそふらむ

504 をしなへてもらさぬ秋の色そとやよもの草木にをけるしら露

同じ御題の中に 露乱風

505 風わたるあしたの原のしの薄しのにみたれて露やちるらん

506 みちのくの忍ふか原の秋かせに朝をく露や乱れそむらむ

朝露

507 朝附日光うつろふさ、かにの糸に玉ぬく軒のしらつゆ

草露

508 もの思ふ秋のならひとゆふ暮は草の袂も露こほるらむ

袖露

509 うき秋をかこちかほなる袖の上はむそし餘りに露そをきそふ

虫

510 むさし野の千種にしけき虫のねは秋の思ひも果やならん

511 秋ふかき尾花かもとになく虫の聲や思ひの色に出らむ

「
(ウ)

月前虫聲

512 をく露もさやかなる夜の月かけに虫のねすめる野への浅ちふ

百首歌よみける中に 暁虫

513 あかつきの友としれはやきりくすなきてねさめの枕とふらむ

飛鳥井家月次御題に 虫聲入夜催

514 なく虫の秋のうきねも数々によるや思ひの猶まさるらん

515 くる、よの霧のまかきに鳴出て月まつ虫のほかなる聲

同じ御題に 嵯峨野虫

516 秋夜の深きおもひをねにたて、虫もさか野の露になくらむ

517 夜寒なる秋のさかの、露霜にわひてや虫の音には鳴らん

詞鏡耳候
故郷虫

518 くつかつらくる人もなきふる郷にたれまつ虫の聲うらむらん

虫聲滋

519 露しけき花野の秋になく虫も色の千種のさまくこのこゑ

蜚

520 露深きおもひはしるやきりくす老の夜床の寐覚とひ来て

鹿

521 妻恋のおもひは同じつらさとや野にも山にも鹿のなくらむ

522 武蔵野に行かへりつ、なく鹿の妻とふ道も限しらしな

飛鳥井家月次御題に 初鹿

523 萩か花ひもとく野へにたつ鹿のねに鳴そめて妻やこふらん

「
(40・オ)

- 飛鳥井家月次御題に 同し心を
 聞わふるこゝろよいか萩の風さのみはつらきならひならしを
 ものおもふね覚の袖の露けさをよなくさそふ萩のうは風
 夜萩
 夜なくの寐覚を時と音つれてまくらになるゝ萩の上風
 萩破夢
 さひしさやさそひきぬらん萩のかせ夢は残さぬ夜半の枕に
 飛鳥井家月次御題の中 萩露
 立まじる草の袂もむらさきの露にうつろふ萩か花すり
 打拂ふ野もりか袖の朝露も花を色なる萩のした庵
 百首歌中に 同し心を
 をく露も色そそひ行朝ななく花さくころの庭の萩原
 野萩
 真萩さく遠里小野の露わけて花すり衣あすもきて見ん
 萩如錦
 朝日さす野へにさらすや秋萩の露にぬれたる花の錦は
 露の色も花に染なす秋萩のよるの錦は月にかくれす
 女郎花
 なひきふす形の小野の女郎花花の枕や露けかるらむ
 薄風
 露ふかき手枕の野の花すすきたれ招くらん袖の夕かせ

「
(ウ)

- 野薄
 ほにいてゝなひく薄のむらくに野へのゆきゝの袖そかすそふ
 百首歌よみける中に 荇萱
 定めなき風を心にかかるかやのやすくはいかて乱れそふらん
 同し中に 蘭
 花の色やほころひぬらん藤袴すそ野の原に匂ふ秋かせ
 僅
 さかりなる色は見えけり朝顔のさきて程なき花の上にも
 飛鳥井家月次御題に 秋花帶露開
 置露ももろき契やむすふらん下ひもとくるはなの朝かほ
 花にをく露の光もいろくにみたれてさける野へのも、草
 飛岡天神宮奉納哥に 草花露
 野へは今花の千種のさまくに色わく露も盛とや見む
 朝草花
 山ふかくぬれてや帰る小男鹿の朝たつ野への萩の上の露
 野花
 百草の秋をあらそふ盛とや野へはみながら花になりゆく
 飛鳥井家月次御題に 野邊秋興と云事を
 うつり行心の花もはてそなき色の千草の武蔵野の秋
 いささらはやとりやからん野への月あかぬ千草の花にくらして

「
(38・オ)

「
(ウ)

すさひ草 後編 卷之三

秋之部

立秋

455 桐の葉もまた散あへぬ朝戸出の袖にまつしる秋のはつ風

立秋暁

456 袖の上も露けさそひて暁のね覚ものうき秋や来ぬらむ

初秋

457 物おもふ秋はきにけりとはかりをしらせそむらん袖の夕露

458 けさはまたふく音たてぬ萩の風身にしみそめて秋はきにけり

初秋露

459 夜の程に秋たつ色の涼しくもけさをきそむる露の玉さ、

秋の初に思ふ事共の侍りける時

460 袖の上も置そふ露のかすゝに思ひみたる、秋のはつかせ

(36・オ)

高城の住吉社奉納哥に 早秋

461 小夜衣つまふく風も身にしみて寐覚の空に秋やきぬらん

幽栖秋来

462 いつしかと秋は来にけりさひしさの猶いかならん蓬生の宿

463 露けさも猶身にしみて八重葎はらはぬ宿に秋は来にけり

七夕

464 まとをなる中やうらみん七夕の天のはころもけふかさねても

465 秋ことにむすふや深き天河なかれてたえぬ星のちきりを

七夕七首よみ侍りける時 七夕月

466 待得たる秋はひと夜と織女^はのこゝろはれたる月や見るらん

七夕河

467 いは浪のよるやまつらん天河たなはたつめのまれのあふ瀬に

七夕草

468 此ゆふへたむくる秋の七草もなひくや星のこゝろなるらむ

七夕鳥

469 ほしあひの空にもさこそつらからめ明るよいそく庭鳥の聲

470 鳥たにもつはさならふるためしにやふたつの星の嘸契るらん

471 織女のわかれをしらは鳥のねもしはしは明る夜を惜みてよ

七夕衣

472 たなはたのこよひ重ねるから衣月日へたてし程なうらみそ

473 織女のまれにかさぬる唐ころもひもゆふ暮の契をやまつ

七夕別

474 ひこ星もけさならふらん人の世のあふはわかれのつらきたくひに

七夕祝

475 いく千秋かけてかはらぬ君か代にふたつの星もあふやうれしき

百首歌よみける中に 乞巧奠

476 ひこ星のあふせの影のふくるよに猶やか、けん庭のともし火

同じ百首の中に 萩風

477 秋よた、さひしくもあるか萩の葉に風の音せぬ夕くれもかな

(37・オ)

(ウ)

夕立晴

432 かきくもる空はしはしの涼しさも照日にかへるゆふ立の跡」

(34・オ)

蟬

433 夕日影もりこぬもりのこかくれに露まつ蟬の聲もす、しき

飛鳥井家月次御題の中に 山蟬

434 夕立ははれし外山の松風に猶しくる、や蟬のもろ聲

435 なくせみのこゑのうちなる涼しさをよそにもさそふ山の下かせ

同じしき御題の中に 扇裡有秋風と云事を

436 むさし野の千草をあかく扇にはす、しき秋の風やこもれる

437 こん秋の風のやとりか涼しさをさそふにあかぬねやの扇は

同じし御題の中に 對泉

438 せく袖に猶す、しさもまし水のあたり露ちる山の夕陰

439 くる、よの月のいつみの水清み底にや秋もすめる涼しさ
涼しさはも せ 涼しさはも せ 涼しさはも せ 涼しさはも せ

同じしき御題に 水邊唯避暑

440 松かけにせくもむすふも涼しさを手にまかせたる庭のやり水」

(ウ)

441 むすふ手のしつくもす、し山陰の岩垣しみつ夏をへたて、

納涼

442 ちる露も袖にす、しき夏衣立ちかりけり松の下かせ

443 かけ深き生田のもりの夕す、み秋より先に又やとはまし

夕納涼

444 ふく風のす、しさしめて夕月もいさ待いてんまつかねの床

水邊納涼

445 山の井のあかてむすはん夕す、み袖のしつくに月うつるまで

飛岡天神宮奉納に 樹陰納涼

446 風さそふ雫も袖にす、しきは秋のけしきのもりの夕陰

飛鳥井家月次御題の中に 松陰待秋

447 立よりてす、しさあかぬ松陰に秋をもさそへ庭のゆふ風

448 このまもる日影もうすき蟬の羽の衣に秋をまつの下陰

飛鳥井家月次御題に 晩夏

449 萩の風そよくゆふへは中垣の間近き秋やはやかよふらむ

450 夏はつるなこりよいかに行年も今はなかはをすきんとやる

夏萩

451 つみとかも身にはあらしなみそき川はやせの浪にあらひ清めて

河夏萩

452 夕浪に流る、麻のゆふは川はらふこ、ろはちりも残らし

453 麻の葉のとまる瀬もなきみそき川身のうき事も流れてやゆく

高城住吉社に百首哥奉りし時 六月萩

454 御萩川けふくみしらん塩瀬よりあらはれいてし神の昔も

「
(ウ)

(35・オ)

- 407 ほとりとふ山沢水のうきぬなはくるしくもあるかもゆる思ひは
水邊螢
- 408 うもれ水あり共しるし山沢の芦の葉かくれ照らすほとるに
よなくにすたく螢の光までせきいれてす、し庭のやり水」
(ウ)
- 409 高城住吉社奉納哥に 同し心を
- 410 とふ螢もゆるや深き浅沢の水にもけたぬよるのおもひは
飛岡天神宮奉納の中に 瀧下螢
- 411 たき川のあたりす、しく飛ほとる岩うつ浪の玉とみたれて
江螢
- 412 月は早入江の浪のくらき夜をほとるの影や又てらすらむ
飛鳥井家月次御題に 螢似露
- 413 風渡る庭の草葉にちる露のきえぬ光やはたるなるらん
くる、よの螢やまかふ草むらにこほれてむすふ露のひかりは
蚊遣火
- 414 賤もさそ思ひやむせふよなくに烟いふせき宿の蚊やりは
夏夕と云事を
- 416 かやり火のけふりの末も立そひてゆふけくもれる山もとの里」
夕顔
(33・オ)
- 417 しら露もなさをくらん夕顔の花にかこへるたそかれの宿
咲か、る花をひかりにをく露の軒端す、しきゆふかほの陰
百首哥よみける中に 蓮
- 418
- 419 池水にかほるもす、しはちす葉の玉こきちらす露の朝風
荷露
- 420 立葉よりこほる、露や池水のはすの浮葉に又むすふらん
池水のはすの立葉の露も又落て浮葉の玉とをくらん
氷室
- 421 いつはとは月日もわかしひむろもり山陰ふかく冬こもる身は
松杉の冬かれしらぬこかくれにさゆる氷室は夏もわかしな
夕立
- 422 時の間に大路は川のなかれかなゆふたつ雨をみなかみにして
見るか内に池をた、へて夏草の葉末なみよる夕立の庭
高城の住吉社に百首哥奉りける時 同し心を
「ウ」
- 423 淡路島かつくはれてなるかみのなるとの沖にきほふ夕立
山夕立
- 424 ふる程をよそにも見せて立つ、く高間の山のゆふ立の雲
夏衣ほすかと見れば夕立の又かきくもる天のかくやま
河夕立
- 425 みなのの川水や測なすつくはねの嶺よりきほふ夕立の雨
行路夕立
- 426 ぬれつ、や野路をいそかん夕立の雨もあしとき袖のおひ風
飛岡天神宮奉納哥に 遠夕立
- 427 山端は日影を見せてゆく雲もとをちの里の夕立のあめ
- 428 429 430 431

- 382 野夏月
すゝしくも葉のほる露に光そふ野へのをさゝのみしかよの月
川夏月
- 383 影やとす浪のまもなし山川のなかれてはやき夏のよの月
飛鳥井家月次御題に 夏夜月庭
- 384 夏のよをてらす螢は影きえて月になりゆくまさこ地の庭
木の間より庭のまさこにもる月やむらゝ白き夏の夜
- 385 竹間夏月
- 386 みしかよの竹の葉分に見る程もあかてそあく窓の月影
陰深き軒端の竹のみしかよをもる程もなき月にうらみん
もりかぬるさえたもうしや呉竹の餘りみしかきよはの月かけ
- 388 百首哥の中に 夏草
- 389 たか為にかきもはらはん夏草の花なき色にとつるみきりは
夏草滋
- 390 分かよふ袖こそ見えね旅人のいる野の薄夏ふかきかけ
飛鳥井家御題に 夏草露
- 391 夕立のなこりの露のすゝしさを緑に見する庭の夏草
- 392 夏草のみとりにかはる光かなましるさゆりの花の朝露
- 393 野夏草
- 394 小萩原しける夏野の露わけて鹿も花さく秋や待らむ
子の日せし野への小松もなつ草の深き緑の陰のうもれ木

「
(ウ)

「
(31・オ)

- 395 ふえのねにそこもしるしあけまきの影はなつ野の草かくれして
庭夏草
- 396 をく露も色そふ秋や急くらん花まつころの庭の夏草
飛鳥井家月次御題に 常夏
- 397 よの程の露の乱れや深からんねたる朝けの床夏のはな
蓬生のしけみにましるなてし子の花にや露も哀かくらん
瞿麦露
- 398 ひとりなる草のまかきに紅ゐる露も色わく床夏の花
照射
- 400 秋をまつ鹿の思ひもいかならん嶺のともしのもえあかす夜に
飛鳥井家御題の中に 射火
- 401 五月山ともすほくしによる鹿の命もさそなみしかよの空
同じき御題の中に 嶺照射
- 402 ともしさすみねのさつおのしらま弓をしていくよか鹿を待らん
ますらおかよるゝ嶺にたつか弓心つよくもとしさすらむ
瀬鵜川
- 403 うつりくる月やうきせのうかひ舟浪にかゝりの影もしらみて
名所鵜川
- 405 夏箕川月になるよもしはし猶う舟さすらし山陰にして
飛鳥井家月次御題の中に ほたる
- 406 飛ふ螢もゆる草葉にをく露の乱れやすきや思ひなるらむ

「
(32・オ)

あしたに

兼廉

359 咲いつる心やふかき花かつみ花は浅香の名にしおふとも

と申贈りければ返しによりてつかはしける

360 花かつみ深き色そふことの葉を浅香の沼の浅くやは見ん

飛鳥井家月次御題の中に たちはな

361 むかし思ふ袖ぬらせとや五月雨のふるき軒端に匂ふ立花

夜廬橘

362 立花のにはひそかよふ老か世の月やむかしとうつす袂に

飛鳥井家御題の中に 橘花盛

363 ほと、きすなれもせになけ立花の花のさかりと匂ふ五月は

「
(ウ)

364 宮人も袖匂ふらしたちはなの近きまもりにあかぬさかりは

橘薫袖

365 むかしおもふ夜半の寐覚に立花の匂ひもしめる袖の上の露

櫓

366 村雨のなこりす、しきゆふ風にちるや櫓の花の下かけ

飛鳥井家月次御題の中に 霖

367 めつらしくさすもしはしの日影にて又かきくもる五月雨の空

368 河水もまさる岸根になひきそふ柳の糸のさみたれの比

五月雨久

369 雲霧も立かさなりて天の戸のあけくれ同しさみたれの頃

370 天つ風吹もはらはて五月雨のいくかとちぬる雲のかよひ路

飛岡天神宮奉納哥の中に 同し心を

371 みつかきの久しくはれぬ五月雨にもりのしめ縄朽んとやする「
(30・オ)

住吉社奉納哥の中に 溪五月雨

372 山つたひ目なれぬ瀧もさみたれに落て漲る谷河の水

川五月雨

373 飛鳥川かはる瀬もなし五月雨の日をふるまゝに測はまさりて

374 水まして深きたか身の思ひ河かよはぬ中のさみたれの頃

渡五月雨

375 みなれ棹さしやわつらふ五月雨にわたせもかはる淀の川長

五月雨の比あやめ田の山莊に

君貴典 いらせ給ひければ

376 雲深き山下陰もけふといへはこゝろはれぬるさみたれの比

夜水鶏

377 閨の戸はあくるにまなき短夜をたゝく水鶏やおとるかすらむ

高城住吉社奉納歌に 夏月

378 影うつす袂もすゝし夏のよの月の桂に風やふくらむ

夏月涼

379 待いつる風より外のすゝしさやはしるなからの袖の月影

380 すゝしくも萩の末葉の打なひき月吹いるゝ軒の下かせ

夏月易明

381 涼しさを袖にうつさん程もなしましたよひなから明る月影

338 同しき比伊地知季慶に遣はしける
うき世には猶思ふらんほと、きすわか山里にもらすはつねを

かへし 季慶

339 山ふかくたつねきかまし郭公またうき世にはしのお初音を

同し山莊に郭公聞んとて友とち訪らひ来りける時

340 なけやなけわかすむ山のほと、きすとはる、人に聲もおしまて

杜鵑花てふ花の盛なる比 郭公の鳴をき、て

341 紅ゐの涙落そふほと、きすなくや五月の花の上の露

夏歌の中に

342 早苗とるしつか門田の雨の中にぬれてこと、ふ山ほと、きす

高城の住吉社奉納哥の中に 早苗

343 しめ縄の長さ日あかす住吉のみとしろ小田に早苗とるなり

採早苗

344 影うつす若葉の山のふもと田に水も緑のさなへとるなり

夕早苗

345 うへ渡す門田の早苗す、しくも葉のほる露になひく夕風
とる程もくる、にはやき山陰の沢田のさなへ猶いそくらむ

爰かしこ早苗取る比

346 みなかみの野田の早苗をとる頃や濁りてきたる末の山川

347 五月雨の頃ほひあやめ田の山莊に我か

君公 いらせ給ひける日 門田に早苗植るを見て

「
(28・オ)

348 民草もさそたのむらん千町田のさなへに餘る雨のめくみを

飛鳥井家月次御題に なつの田と云事を

349 うへわたす小田の若苗雨はれて夕日うつろふ水のす、しさ

早苗とる賤やきくらん郭公なく夕陰の山のすそ輪田

五月五日にあやめ田の山莊に

君のいらせ給ひける時

351 山陰に聲もおしむなほと、きすをのか五月の今日を待えて

けふとてもたれかはひかん山沢の水草かくれにおふるあやめは

曳菖蒲

352 池水にぬるともひかんあやめ草あかぬ匂ひをうつすたもとは

刈菖蒲

353 うき草もなみよる池の菖蒲草かる跡す、し水の朝かせ

池菖蒲

354 鴉鳥の下のかよひも匂ふらし池のあやめのかけふかきころ

かり残す陰もすくなし水鳥の床あらはなる池の菖蒲は

百首哥の中に 簷菖蒲

355 なひきそふ忍ふの露もかほる也あやめかりふく軒の朝風

庭にうへ置ける花かつみの盛なる比 楠田何某に申

つかはしける

356 咲にほふ色もゆかしの花かつみかつみせはやと人そまたる、

其日花見んとて楠田氏の訪らひ来りけるか あけの

「
(29・オ)

「
(ウ)

雲間郭公

313 ひと聲をもらし初けり郭公月まちいつるよひの雲間に
314 たか方にはつねもらすや郭公雲間の月にさそはれてなく

「
(26・オ)

雨中郭公

315 かきくらしふるは涙かほと、きすなくねをつくすむら雨の空
316 今をせにふりいて、なく郭公をのかなみたのさみたれの比

飛鳥井家月次御題に 五月郭公

317 なく聲もおほつかなしや郭公さみたれくらす空のやみ路に

318 あやめ草匂ふさつきのほと、きすなれもたえせぬねをや鳴らん

暁郭公

319 またてきくはつ音はうれし郭公うき暁の老の寐覚に

朝郭公

320 郭公まつにねぬ夜はつれなくておとろかさる、けさのはつこゑ

夕郭公

321 夕くれの天つ空なる郭公雲のはたてにくりかへしなく

「
(ウ)

322 しら雲の夕ある山のほと、きす月より先にもらす一聲

百首哥よみける時 夜郭公

323 ふくるよの枕の山のほと、きす寐覚とひきてことかたらなん

山郭公

324 さやかなる声は雲間に残るよの月の入佐の山ほと、きす

杜郭公

325 たれとかは昔かたらふ郭公こゑも老蕪のもりのこかくれ

326 何をさはなけきの杜に打わひてねにはなくらんやま郭公

関郭公

327 ゆく人も心と、めん関路とや山郭公すきかてになく

328 関の戸もあけゆく空にひと声を名のりてする山郭公

海邊郭公

329 ねさめしてあまや聞らんほと、きすうらめつらしきよはの初聲

「
(27・オ)

浦郭公

330 淡路島かよふか夜半の郭公なくねを送る須磨の浦かせ

331 なき渡るなにはの三津のほと、きすこと浦人も今かきくらん

332 うら浪のよるやもらさん郭公難波の芦のしのふはつねは

磯郭公

333 もしほくむあまのぬれきぬうら馴てきくや磯邊の山郭公

百首哥の中に 里郭公

334 郭公もらすはつねは里の名の思ふにたへぬ心なるらし

山家郭公

335 山住の独におしきほと、きす初音とひ来てきく人もかな

あやめ田の山莊にて初て郭公の鳴をき、て

336 き、つとも誰にかたらん郭公山すみの身につくるはつこゑ

337 ほと、きすまた山深き思ひねをまつらん人に我やもらさん

「
(ウ)

卯花似月

290 咲匂ふうの花山のさやかにも所をわきて照らす月かけ

夕卯花

291 山もとの道のしるへか夕やみをてらすうつきの花のひかりは

卯花埋路

292 ふみわけん雪かと思ふ卯花の咲うつみたる小野の細道

垣卯花

293 うつもる、垣根は深ししら雪のきえせぬ色をうつすうの花

294 かこひなす よそめそあかぬ うつ木垣ほのぬしやたれ月雪花の色をひとつに

葵

295 かけそふる緑もす、しあふひ草けさをく露の玉のすたれに

待郭公

296 たか世より待ならひけん郭公さらてももらすをのかはつねを

297 まつ夜のみあたに数そふほと、きす初音をいつと契てしかな

298 つれなさを誰にならひて郭公またる、頃の聲おしむらん

百首哥よみける時 同し心を

299 郭公まつよのうさのつもる共おもはて猶やつれなかるらむ

あやめ田の山莊にてよめる

300 松の戸のまつとししらはひと聲もかたらひそめよ山郭公

夏歌の中に

301 つれなさをさのみうらみし郭公わかためになく初音ならしを

人傳郭公

302 我になともらしかぬらんほと、きすき、つと人のつくるはつねを

飛鳥井家月次御題に 初郭公

303 ほと、きすまた世に思ふ心とや夜深くもらすはつねなるらん

304 たか身にもまたる、比の郭公いかて里わく夜半の初聲

飛岡天神宮奉納哥の中に 聞郭公

305 心さへさそはれにけりほと、きす行ゑもしらぬ一聲の空

始聞郭公

306 人つてもまたきかさりし郭公我に告るやはつねなるらむ

楠田淡水となんいへる人此里を出て 鹿野屋てふ所に

移り住りける時 卯月はかりに申遣はしける

307 もろ共に待しは去年の郭公たれとことしの初音きくらん

郭公何方

308 村雨も里わく夜半のほと、きす鳴てとふらん方も定めす

郭公一聲

309 ひと聲は夢はかりなるほと、きすおほつかなしや夜半の枕に

310 ほと、きすほのかなる夜のひと声は覚る枕の夢かあらぬか

郭公幽

311 まちえても心つくしの郭公このまの月のほのかなるこゑ

月前郭公

312 待出る有明の月にさそはれてはつねうれしき山ほと、きす

「ウ」

「
(25・オ)」

「
(ウ)」

270 今更に又おしまるゝなこり哉花より後の春のわかれは

271 花鳥も今はまれなる弥生山とまらぬ春のやゝくれて行

暮春月

272 ほのかなる影もかすみてゆく春のなこりはいとゝ有明の月

273 春の色も今は名残と山のはにたえゝ霞む有あけのつき

暮春鶯

274 花ちりし枝のうくひす打わひてなくねに残る春もすくなき

275 とゝまらぬ春のわかれやつらからん花ちる山に鶯のなく

暮春鐘

276 いつくにかくれゆく春をさそふらん空にかすめる鐘のひゝきは

277 ちりすきし花はきのふの山寺に春もなこりの夕暮のかね

三月尽の日によめる

278 散花のなこりも今日は立そひぬ老てうき身の春の別に

「
(ウ)

「
(23・オ)

すさひ草 後編 卷之二

夏之部

高城の住吉大明神社に百首歌奉りける時 首夏

279 山々の霞のころも立かへてみとり色そふ夏はきにけり

更衣

280 花衣かふるやおしき蟬の羽のうすきにならふ人のこゝろも

朝更衣

281 花の色は今朝立かへてなつ衣ひとへに春のなこりをぞ思ふ

飛鳥井家月次御題に 卯月藤

282 さくら花ちりしうつきの木末にも色香をかけて残る藤浪

283 神まつる卯月のもりの藤かつら絶せぬ花のかさしなるらん

同じき御題の中に 緑樹

284 すゝしくもなひく若えのみとり哉花はきのふの跡の山かせ

285 花に見し桜やいつれみ山木のおなし若葉にみとりそふ陰

同じき御題の中に 新樹朝露

286 朝露にぬれて色そふ若楓そめんもみちの秋もしられて

287 見し春の花のなこりの雲もなし山は青葉の木々の朝露

新竹

288 ことしおひのまた若竹のふしのまによろつよふへき色やこもれる

牡丹

289 くれなるの色にやとめる深見草花にてる日の影をうつして

「
(24・オ)

飛鳥井家御題の中に 紅躑躅

249 桃の花咲る岡邊の下つ、し千入に春の色やあらそふ

250 くれなゐの浪も立らん瀧川の岩ほのつ、し影をうつして

百首哥よみける時 苗代

251 岩つ、し咲そふ陰にせきいれてくれなゐにほふ深き苗代の水

苗代蛙

252 苗代の水ゆたかなる折にあひて蛙も雨のめくみをやしる

飛鳥井家月次御題に 蛙

253 雨霞そくむ池の菱つる打はへて長き日あかすかはつなくなり

254 くれてゆく春やうきぬの草かくれ水の蛙も打わひてなく

夕蛙

255 水増る沢田の雨の夕くれををのか春とや蛙なくらむ

水邊蛙

256 山沢にしける芦間のうもれ水ねにあらはれてかはつ鳴也

257 やまふきの下行水になくかはつ聲もせかる、花のしからみ

歎冬

258 春の色をかこふや深き山吹の八重咲匂ふ花のまかきは

飛鳥井家月次御題に 薔

259 八重にはふ小枝の露やおもからんなひくまかきの山ふきの花

260 さく頃は花わけかよふ里の子の袖さへ色にいてのやまふき

歎冬露

「
(22・オ)

261 さく花も光やみかく玉川のきしのやまふき露ふかくして

川歎冬

262 岸ねよりなひくさえたのしからみにせくや川瀬の山吹のはな

百首哥の中に 籬歎冬

263 やまふきの花のあるしよ誰ならんいはぬ色香にかこふまかきは

あやめ田の山莊にわか

君貴典公 いらせ給ひける時 庭の歎冬の盛也ければ

264 をく露の恵をこめて山ふきの色香もそはん花の八重垣

飛鳥井家月次御題に 藤

265 かきつはた咲そふ池にむらさきの色をかはしてうつる藤浪

266 春ことに藤さく軒の山松は時しる花のこすゑとも見む

高城の住吉社奉納哥の中に 松上藤

267 いく千世もちらてを匂へ藤の花咲そふ松の色にちきりて

「
(ウ)

春の末つ方旅におもむきゐたりける時 鹿兒島なる大迫

貞經となんいへる友たち予か住ところを訪らひ来り 相

見ぬ事のほいなきさまをかきつ、けしふみに一首の哥を

添て あるしをとへは庭の藤盛なりける など申贈りけ

れは 返しに文した、めて遣はすとて斯なん書そへける

268 立かへり又もとへかしさく花の色もゆかりのやとの藤浪

暮春

269 夕霞立そふ空のはてなくもなこりをこめて春そくれゆく

落花隨風

227 ちるのみか猶さそはれて行方も風まゝなる花そはかなき

228 よしさらはさそふまにく散花は行多も風にまかせてや見ん

落花如雪

229 風さそふ木のもとことに散花の雪は日影にきゆるともなし

飛鳥井家月次御題の中に 花雪

230 空にきえ庭につもるも春風のさそふまゝなる花の白雪

231 木のもとにつもるとすれは吹たてゝ風にあまきる花のしら雪

232 春風のさそふ砌にちりしきて枝につもらぬはなのしらゆき

233 あやめ田の山莊にて春雨の降ける時 花の散を見て

ちりまかふ雪も霰も匂ひきて外山の花に春雨そふる

川落花

234 ちる花のしら波高きよしの川みねの桜に嵐ふくらし

瀧落花

235 しら浪も餘りて落る瀧川のいはまの花に春かせそふく

飛鳥井家月次御題に 花波

236 いそ山のさくら散かふ塩風にかすみてよする花のしら浪

237 比良のねの桜ちるらし此頃は花の波たつ鳩の水海

弥生の末はかりに あやめ田の山莊の庭に桜の一もと

咲残りけるを折て

君貴典の御かたはらまて奉りける時 添て奉りし

「
(20・オ)

238 咲残る山さくら戸の花心とはれんとてや猶にほふらむ

君より御かへしとて賜はりける御歌

239 咲残る色香も深き山里のひと木の桜又やとはなん

其あけの日に 花見給はんとて

240 君のいらせ給ふけるに よみて奉りける

色も香もけふそしらるゝ花さくら残れる山のかひは有けり

やよひの三日に 同し山莊に

君のいらせたまひける時

241 ものいはぬ花も折しる今日ならんわけてとはるゝ山の下道

同し三日 同し山莊に人々訪らひ来りける時

242 春の色をけふに深めてさく桃のくれなる匂ふ花の下水

飛鳥井家月次御題に 桃花

243 さく桃の下みち深くわけ入て物いはぬ花のさかりをそとふ

244 山賤のそのふをせはみ咲もゝも紅るふかき色はかくれす

同し御題の中に 梨花

245 咲つきて春そ久しき梅桜ちりにし跡の軒のつまなし

246 しら浪も花の色そふ桜麻のおふの浦なし咲匂ふころ

杜若

247 さく花の色なへたてそかきつはた沢への水草立ましりても

堇菜

248 忍ふにはあらぬすみれも春日野の露にみたるゝ袖の花すり

「
(ウ)

「
(21・オ)

208 色も香もあはれ昔の春ならずふりにし里の花の老木は
209 住すて、あたなる春のふる郷に残る老木の花もすくなし

山家花

山里にちきらぬ人もまたれけり春は心の花にうかれて

あやめ田の山莊の花咲出ける比

見せはやと心に契る人はこて花にことゝふ庭の松かせ

同じ山莊の花見んとて人々来りければ

うくひすの聲のほひに引かれてや人もとふらん花の下庵

213
さく色もけふをせにせん山桜人の言葉の花の匂ひに

同じ所に或人來りてひめもす花見ける時
くるゝとも

よしや歸らし　なと申けるをきゝて

└
(ウ)

春寒き山路ならすはひと夜たに契らんものを花の下ふし

依花待人と云事を

さけはたゝとふへき人ぞ待れけるわか為うへし庭の桜も

たかためとうへしにはあらぬ家桜さけは人のみなとまたるらん

花春友

へたてなき心の友よさくら戸のあけぬくれぬと花にうかれて

花便

218 契り置き盛はつけよ山里もとはれん花の便すくさて

219
とはるへき花のたよりを待得てや山住の身も人にしられん

花主

たか里とわかてもとはん山もとの花の色香をあるしにはして

折花

色香しる人の為なる家つとは手ををうしと花も思はし

嵐ふく山路の花よ一枝をたをるはおしむこゝろもしれ

或人の花を折けるを見て

山さくら道ゆきふりの手すさひにおるはつらしと花も恨みん

鹿児島の新納時升となんいへりける人 またいときな

かりし頃ほひ庭に一木の桜を移しうへていといたうめて

はやしつゝ、既にいそとせはかりもすくしきつるに　こたひ

さるしさいにより
へちにすみ所をかへて移り行ける時

其桜にこよなう別を惜み　詩を作りて見せたりし

かはをのれも同じ心のからうたをつゝり時升に遣はし

けるつゐてにかくよみて其奥にかきそへける

花もさそおもひわふらん家桜なれしいそしの春のなこりを

百首歌の中に
惜花

おしむにもとゝまらぬ世のことはりをうつろふ花の上に見すらん

└
(ウ)

落花

226 たか里か色香にもれん桜花ちりかふころの四方のはるかせ

- 183 帰るさもわする、花に日数へて故郷人やちるをまつらむ
 184 木のもとにちらすは千世も立なれんあかぬ日数を花にまかせて
 飛鳥井家月次御題に 花下見月
 185 くれてしもあかぬ軒端の山さくら花の光に月もくもらす
 186 あかなくもくらす山路にさく花の光を見せて匂ふ月かけ
 あやめ田の山莊の花盛なる比 人々伴ひまかりて宿り
 ける程に 月もいとおもしろかりければ
 187 春夜は千々のこかねも何ならす軒端の花に匂ふ月かけ
 軒近き花の雲間をより兼てさくらにかすむ春のよの月
 霞中花と云事を
 189 山姫の春のかさしの花さくら霞の袖になにおほふらむ
 雲間花
 190 あけ渡ると山の雲の晴間にもはれせぬ色や花のひとむら
 暁花
 191 残る夜の月もうつろふ山のはにあげゆく花のひかりをやそふ
 夜花
 192 月かけはよし霞む共軒端なる花なはらひそよるの山風
 山もりもひとよはゆるせ桜花あかぬ木陰にちきるかりねを
 山花
 194 峯の雲ふもとの雪もひとつにて花にかすめるみよしの、山
 195 さくら咲く色をふかめて吉野山花の所は霞むともなし
- 「
(17・オ)

- 196 今をせにさくやはつせの山桜檜原をよきてかゝるしら雲
 山花盛
 197 みねふもと花にそかこふ芦垣のよしの、桜さかりなる頃
 暮山花
 198 咲つゝこのまを分て山のはの花に入日もかけ匂ふらし
 谷花
 199 山桜人にしられぬ谷陰は花もあたる春のうもれ木
 杜花
 200 立よりて色香も袖にうつさまし花のしつくのもりの下陰
 野花
 201 桜狩あかぬ末野に行くれて 木の下ふしや花に契らん
 わけくらす野邊の桜の下かけはからはや花に草の枕を
 百首哥よみける中に 関花
 203 関守もいとまある世の花心色香に人をとゝめてや見る
 湖邊花
 204 さくら花さそふなからの山風に霞みて匂ふ志賀の浦浪
 磯花
 205 磯山の花のみるめにうかれきて浦こく舟も心よすらむ
 浦花
 206 心なく立なれぬらん海士衣うらのとま屋の花の色香は
 古寺花
- 「
(18・オ)

- 161 関路桜
戸さしせぬ世にあふ坂の山桜花や関路の人と、むらむ
- 162 瀧邊桜
白糸も花をりそへて瀧つ瀬の岩もと桜咲おほふころ
- 163 竹間桜
枝かはす竹のはやしの桜花いくよの春をちきりてやさく
飛鳥井家月次御題の中 桜柳交枝
- 164 花の色もみたれそひけり糸桜なひく柳の枝の春かせ
枝かはす花に緑にをりはへて柳さくらの錦見すらむ
- 165 遠村桜
春はいさうときもとはん家桜とを山もとの花のあるしを
- 166 閑庭桜
咲にはふ色もあたる花さくらとはれぬ庭の春そさひしき
- 167 獨見桜
我のみはあかぬ軒端の山桜見せはや人に花のゆふはへ
待花の心を
- 168 待花の心を
- 169 つれなさもさのみ桜のとならて花まつ頃のさゆる春かせ
つれなさをかこつもつらし山桜またてや花のひらくをも見ん」
(ウ)
- 170 尋花
わけ入て行ゑもしらぬ山路哉花をこゝろのしをりにはして
いつくをかさしてもとはん桜花あふをかきりの春の山ふみ
- 171
- 172

「
(15・オ)

- 173 分きつる跡の山路のしら雲を花とは誰か又たつぬらむ
- 174 高城住吉社に百首哥奉りける時 初花
まつ程も染しこゝろの花さくら咲出る色を浅くやは見ん
我君より初花のひと枝に添させ給ひて
手折てし此ひと枝に咲初るなといへる御歌をたまはりければ
御かへしとて 御かたはらまて奉りける
- 175 言の葉の匂ひをそへてひと枝のはつ花桜色そことなる
見花
- 176 見る人もいとまある世にさく花はしつけき春にあふやうれしき
あかてちるならひもわかす桜花さかり待いて、むかふこゝろは
- 177 百首哥よみける中に 翫花
あたなりと花や思はん色に香にあかてうかる、人の心を
- 178 花未飽
うつり行ならひもあたの花こゝろあかて幾春別れきぬらむ
此春もあかぬちきりか山風にさそはれやすき花のなこりは
- 179 花忘老
またれつ、なれゆく花よ年ことに老をかさぬるうさは思はて
- 180 依花日短
山さくらあらぬ木陰にうつさはや花なき里の永き春日を
- 181 花下送日
- 182

「
(16・オ)

138 鳥のねも花の光もかすくにあけはなれ行桜戸の春

飛鳥井家月次御題に 春曙鴈

139 嶺こゆる鴈はなこりやおしむらん月と花との明ほの、山

あけほの、春のあはれを身にしめて別る、鴈もねにや鳴らん

百首哥の中に 帰鴈

141 帰るかりいかなる春の契より花にはつらくわかれそめけん

霞中帰鴈

142 そことなく霞む雲路の帰るさを誰に告てか鴈の鳴らむ

夜帰鴈

143 花にうきなこりのみかは春のよの月にわかれて帰る鴈かね

おほろよの月こそ残れゆく鴈の聲も跡なく霞むたかねに

帰鴈遥

145 はるくくと見送る空にかへる鴈霞まぬ聲もや、きえて行

雉

146 花の色もあらはれ初て明るよのと山のき、す聲そ霞まね

飛鳥井家月次御題に 野邊雉

147 狩人のいる野のき、すはかなくも子を思ふ道にねをや鳴らん

妻こひに身をやかふらんかり人のいるの、き、すかくれかねては

雲雀

149 ちる花も空にやさそふ春風にふかれてあかる野へのひはりは

燕

「
(14・オ)

150 かりかねのこし路に帰る折からやつはめは軒の古巢とふこゑ

百首歌よみける中に 春駒

151 春深くあさる野中の沢水にたてる芦毛や青鷺のこま

遊絲

152 是る、日の光にみれば
いつくよりくりいたすらん春の野の^へ日影に遊ぶ糸の^ゆ乱れは^ふ

遅日

153 空の海霞の渕やふか、らんわたるに遅き春の日かけは

春日遅

154 長しとも思ひやわひん花鳥の色音にくらす春日ならすは

飛岡天神宮に梅桜松の三十首歌奉りける時

桜初開

155 待わふる心もけふはとけそめつ庭のさくらの花の下ひも

同じ哥の中に 雨後桜

156 庭桜はころひそめてよるの雨のなこり色そふ花の朝露

桜花盛

157 をしなへてみねもふもとも桜色に花咲みつるみよしの、山

深山桜

158 さくら花さける盛はかたはらの深山木までも匂ひそふらん

飛鳥井家月次御題に 山路桜

159 わけて入山路のさくら奥深く咲そひぬらしにほふ春かせ

160 うかれ行春の心の花さくら深き山路も遠しとはせず

「
(ウ)

- 115 ゆく人も心ひかれてみちのへに立よる陰や青柳のいと
飛鳥井家月次御題に 春色と云へる事を
- 116 青柳の緑も花の紅るもみやこの春に色やあらそふ
早蕨
- 117 さく花をたつぬる野へのはつわらひ道行ふりに手折ても見ん
樵路早蕨
- 118 柴人の帰る山路の家つとは花にまさりてたをるさわらひ
飛鳥井家月次御題に 草漸青
- 119 とけそむる雪間の緑日にそひてかつくもゆる野への若草
夜の雨や染いたすらん若草の昨日にまさる今日のみとりは
- 120 野若草
- 121 霞たつ野原のひかけ打けふりや、もえ渡る春の若草
磯春草
- 122 おりくくに塩くみたゆむあま衣ほさてやはるの磯菜摘らん
沖つなみあらきいそへのいはまにも春のみるめの色をよすらん
- 123 百首哥の中に 春雨
- 124 なへて今木々のこのめのはる雨や山の緑を染いたすらむ
夕春雨
- 125 さひしさはまきれん花の色もなし霞みてくる、庭の春雨
夜春雨
- 126 あすはいさ野邊のみとりも尋ね見んもゆるよのまの春雨の頃

「
(12・オ)

- 127 ちる花のなこりをそ思ふつくくよるの雨きく春の手枕
飛岡天神宮に哥奉りける時 庭春雨
- 128 霜かれし浅茅か庭もうるふ世の恵はもれぬ春雨のころ
春月
- 129 佐保姫の霞の袖のはるの月涙のよそに猶曇るらん
わきて猶霞むはつらし春の月老のな^{みた}かめのくもるならひ^は
- 130 春月朧
- 131 おほろなる空や光の春の月かすむにつけて哀をそゝふ
春歌の中に
- 132 おほろけに霞むを春の色なれや花さく山の有明の月
山春月
- 133 朧なる空ともいはし吉野山花を光の春のよのつき
川春月
- 134 飛鳥川かはる晴間の影も見す霞の渕にふくる夜の月
春曙
- 135 霞たつ外山の花もそことなくこゝろに匂ふ春の明ほの
尋ね見ん花の所もおもかけにまつうつりくる曙の空
- 136 海邊春曙
- 137 海こしの山のはつかに見えそめて霞む千里の浪の明仄
きさらきはかりあやめ田の山荘にやとりける時 曙のけ
しきいとをかしかりければ

「
(13・オ)

「
(ウ)

野梅

92 立よりてあかぬ野中の梅か、はいさかへるさの袖にうつさむ

「
(10・オ)

野径梅

93 打渡す野へのゆき、の袖の上も匂ひにもれぬ梅の追風

梅移水

94 匂ひさへ深くそうつる山水に咲そふ梅のはなか、みは

里梅

95 花さかぬ里の垣根も梅か、の匂ひへたてぬ春風そふく

96 行すりの袖さへ花に匂ふなり梅盛なる里の春かせ

隣家梅

97 色も香も何かへたてむ中垣をさしこす梅の花の木末は

古宅梅

98 住すてしたか世の春のなこりとやふるき軒端に匂ふ梅かえ

梅薫衣

99 立かへる後さへあかぬかり衣わけし山路の梅のうつり香

「
(ウ)

梅薫枕

100 いと、猶夢そみしかき春夜のまくらとめ来る梅の匂ひに

101 あくる夜を花にいそかん窓の梅にほふにあかぬ春の枕は

梅迎客

102 うくひすの聲より外にさそはれて人もとひくる宿の梅か香

梅の咲乱れたる木陰に鶏のむれゐるを見て

103 羽風さへ香に匂ふらん咲梅の花の下はむ鳥のひとつれ

飛鳥井家月次御題に 紅梅盛

104 さく梅のこそめの色の紅るにおほふさかりの花の袖垣

同じ御題の中に 梅紅白

105 咲まじる立枝の梅の色はへて紅葉も雪も花に見すらん

106 さく梅の片枝は雪の色なから夕日も匂ふ花のくれなゐ

柳弁春

107 花はまたにほはぬ比も青柳の糸のみとりにみゆる春かせ

柳風

108 長閑なる世は春風のふく方になひく柳のいとも乱れす

109 春風のさそはぬひまも青柳のこゝろからとや打なひくらん

柳露

110 朝露にむすほ、れたる青柳の糸のみたれは風やとくらん

111 ぬきみたる柳のいと打はへて朝日にみかく露の玉の緒

百首哥よみける時 岸柳

112 遅きとき色もわかるれ湊江のかなたこなたの岸の柳は

池柳

113 風わたる池の柳のみたれ髪水のか、みに影も定めす

河柳

114 水けふりはれ行跡の朝風に河そひ柳うちかすむかけ

百首歌の中に 行路柳

「
(ウ)

「
(11・オ)

飛岡天神宮奉納哥の中に 夕鶯

70 打けふる竹のは山の夕くれになくうくひすのほのかなる聲

谷鶯

71 谷深きふるすの雪のうもれ木に春とほしるややつくらん鶯のこゑ

鶯出谷

72 谷陰の雪よりいて、うくひすもみやこの春にとけそむる聲

野鶯

73 そことなく梅の匂ひもとをき野の霞の奥に鶯のなく

74 鶯の羽風やもさむき野への霜また打とけぬけさのはつこゑ

旧巢鶯

75 とけやらぬ雪のふるすに鳴初てむすほれやすき鶯の聲

竹鶯

76 春ことにやとりかはらて呉竹の千世やしむらん窓のうくひす

飛鳥井家御會始の御題に 鶯千春友と云事を

77 あかす猶まかきの竹のいくちよも友なひ馴ようくひすの聲

同じ御題の中に 鶯有飲聲

78 長閑なるも、さえつりの数々に春をよろこぶ鶯のこゑ

79 うくひすも谷より出て君か代にあふや嬉しき春の初聲

ささらき末つ方 あやめ田の山莊に友とちさそひてま

かりけるに 庭なる梅花のとく散過たるに 鶯の鳴

をき、て

80 とはれこし花は跡なき山陰にたれをさそふか鶯のこゑ

飛岡天神宮に梅桜松の三十首哥よみて奉りける時

雪中梅

81 朝戸出の匂ひにしるしら雪の□つむ垣ほの梅のはつ花

同じき奉納の中に 月映梅

82 さやかなる花の光にうつり来て梅のこのまは月も霞ます

梅風

83 さく梅の垣ねやいつこ山もとの霞をもれてにほふ月かせ

84 たか方にさそひ行らん春風の吹もと、めぬ袖の梅か、

梅薫風

85 いくよりさそひきぬらむ咲梅の木末もわかぬ風の匂ひは

高城住吉社に奉りける哥の中に 同じ心を

86 そことなくさそはれ渡る梅か、の行ゑや風の心なるらむ

飛岡天神宮奉納哥に 暁更梅

87 梅か香も猶身にしてみてさく花のひかりにしらむ有明の窓

或夕くれに梅花を見て

88 うくひすの聲もねくらに匂ひきてあかぬ軒端の花の夕はへ

夜梅

89 月かけは霞み果たる軒端より梅の匂ひそくもるともなき

90 花の色も心にうつせ春夜のやみにまきれぬ梅のほひは

91 手枕のね覚夜深き梅のかせたか袖の香をさそひきぬらむ

「ウ」

「(9・オ)」

「(ウ)」

46 雪の中もそれと分れし嶺の松春は霞のうもれ木にして

野霞

47 村きえの雪間の野への春を浅みたてる霞の色もつ、かす

河上霞

48 河つらの里の烟もふきませて果なくかすむ水の朝かせ

霞中瀧

49 石はしる水のなかれはうつもれて霞そひ、くみねの瀧つ瀬
「(7・オ)

海上霞

50 住吉の浦のみるめも立そひてのとかにかすむ淡路島山

浦霞

51 はし立の松ふく風はあらはれて霞みわたれるよさの浦浪

52 あまのたく烟も春の色そへてかすむそ深き塩かまの浦

遠村霞

53 朝夕に霞みそひけり山本の里のけふりも春を深めて

百首歌よみける中に 子日

54 けふにあひてひかる、野への姫小松千世のはしめのはつねなるらん

子日松

55 千世の色もひく手にこもるねの日哉心をへの松の二葉は

山残雪

56 花さかぬ木末の春の色なれや横たつ山に残るしら雪
「(ウ)

57 奥山の岩木か中もくる春の跡は見えけり雪の村きえ

春雪

58 消残る去年のかたみにふりそひてつもる高ねの春のしら雪

きさらき初つ方 寒かへりて雪の降ければ

59 春寒きあらしの窓のあけ方に梅か香ながら雪そちりかふ

60 梅のはなさきてこふかき軒端より散かふ雪もにほふ春風

百首歌中に 餘寒

61 打とけし岩間の浪の立かへり又春さえて氷るやま川

同じ百首歌に 澤若菜

62 つむ袖のしつくも寒しあさ氷とくる野沢の水の深芹

摘若菜

63 打拂ふ袖をはる野の雪間にてまた下もえの若菜をそつむ

飛鳥井家月次御題に 若菜契多春

64 よはひをはのへの若なに契をきて千年もつまん行末の春

同じく御會始の御題に 鶯告春

65 呉竹の葉かへぬ陰も鶯の花なる聲に春やつくらむ

66 花遅き軒端の梅にうくひすの春をつけてや匂ふ初こゑ

曉鶯

67 深き夜の老の寐覚をとひかほにきつ、かたらふ窓の鶯

朝鶯

68 春寒き朝けの霜のむら竹に日影やいそくうくひすの聲

69 あさ日さすねくらの竹の霜消てなくねもとくるその、鶯

21 若水にふかき恵をくみしりて老せぬ世々の春やいは、ん

春の初つ方に雪のいたう降ける時

22 春寒きかしらの雪もふりそひぬ齡かさなる年をむかへ□

春生人意中

23 けさよりは長閑になりぬみやこ人心の花に春をむかへて

24 花鳥にしらせてしかなけふよりは人のこゝろの春になる世を

我君^{貴典}心翁寺にて詩歌の会せさせ給ひける時

風光処々生と云事を

25 花鳥も色音や日々に増るらんかすむ野山の春のひかりに

風光日新

26 昨日より今日は立そふ山のはの霞や春の色を染らむ

27 雪さゆる春の光の日にそひて野への緑そ深くなりゆく

28 梅か香もまさる日ことの春風になひく柳のみとりをやそふ

毎山有春

29 立そむるよもの山への朝霞もらさぬ春のいろは見えけり

30 あさ霞ゆたかにたてる君か代の春にはもれぬよもの山のは

飛鳥井家御會始の御題とて賜はりしかは讀て奉りける

春山成興

31 雲井より春きにけりとみね高く都の富士やまつ霞むらん

32 日にそひてかすむみやこの山々にのときき春の心をそやる

同しき御題の中に 春山朝

33 程^{やかてまた}近く花も待出ん春霞色とる山にむかふあしたは

同しく御會始の御題 霞中春風

34 佐保姫の霞の袖につゝまれて世はのとかなる春風の聲

35 のとかにも春ふく風の程見えてむらゝかすむ山端の空

36 朝かせの長閑にわたる音はして春に霞める岡の邊の松

同しく月次御題の中に 霞春衣と云事を

37 野も山も春のみとりのはつしほに霞の衣染てほすらむ

38 山^{みれば}の花の錦の下染にかすみのころも色や立そふ

同しき御題に 霞添春色

39 長閑なる春のひかりに雪きえて霞色そふ四方の山端

40 消あへぬ高ねの雪も朝なゝ春の色とや霞み行らむ

飛岡天神宮奉納哥の中に 朝霞

41 朝ことにとをさかりつゝ山のはの見えぬや霞む光なるらん

夕霞

42 花鳥の色音もふかく立こめてかすみそ匂ふゆふくれの山

山霞

43 さほひめのおもひやいかに忍ふ山ふかきかすみの袖おほふらん

44 花鳥の色音まつまの春そとやむかふ山邊のまつ霞むらむ

高城住吉社に百首哥奉りける時 同し心を

45 あけ渡る春の海への浪間よりかすみてうかふ紀路の遠山

嶺樹霞

すさひ草 後編 卷之一

春之部

立春

- 1 朝日影にほへる空の長閑にも霞みそめてや春の立らむ
- 2 ゆく年をよそにへたて、天の戸の明れは春とけさ霞むらん
高城住吉社に百首哥奉りける時 同し心を
- 3 照らす日の光かすみてけさよりの春に和らく神のみつかき
立春天
- 4 もろこしもけさ仰くらん日の本の空よりあくる春の光を
月も日もいかにめぐりてゆく年の同しあまちに春のきぬらむ
立春風
- 6 雪氷吹とくけさはのとかにて風のこゝろも春をしるらし
百首哥よみける中に 立春霞
「
(4・オ)
- 7 けふといへはむなしき空もうらゝかに霞みて春の色を見すらん
立春山
- 8 けさよりは春たつ色に霞む也雪に目なれし山端の空
立春河
- 9 いは波も今朝打出る山川の氷のひまに春やたつらむ
飛岡天神宮奉納哥の中に 立春梅
- 10 いとはやも花咲初てけさよりは春も立枝の梅かほるなり
いとをはに見するはヒ春も立枝の梅かほるなり
年の内に春立ける日 梅の花を見て

- 11 暮のこる冬の日数にさく梅もけさやことしの春のはつ花
早春風

早春風

- 12 袖さえし去年の雪けもいつしかに改りぬる春のはつかせ

閑路早春

- 13 昨日今日こえる春にあふ坂の閑も戸さゝぬ世はのとかにて「ウ」

飛岡天神宮に梅桜松の三十首歌奉りける時 早春梅

- 14 春も今たつや立枝の梅のはなこち吹初て猶にほふらむ

初春待花と云事を

- 15 きのでけふ世はのとなる春風にやかて匂はん花そまたるゝ

- 16 春浅き外山の風猶さえて花まつ木々に雪そちりかふ

初春祝

- 17 うつもれし雪とけ初て草も木もけふより春の恵をやしる

試筆

- 18 改まる春にのとけき朝もよひきのふはさえし四方のあらしも

弘化三年の元旦に六十の齡に成ければ

- 19 若水の若きをしのふけさの春かはるむそしの影をうつして

右の哥を

飛鳥井前大納言雅光卿に奉りけるに そを祝ひ給へる

よしにて

雅光

- 20 けさの春かはらぬ姿うつしつゝ、汲ていはへよ千世の若水
といへる御歌を賜はりしかは 忝さによみて奉りける

すさひ草後編序

さきにつからよみ出つるかれこれの歌とも

天保七とせの申の冬はかりにかき集めて

十之巻となし すさひ草となんなつけ

をきぬ その後はた年餘りの月日をへて

又なむかきちらしたるあた言の葉 こたひ拾ひ

よせて七の巻とし すさひ草の後編となんなし

をくも たゝ是老の手すさひなりかし

老て猶かひなき海人のすさひ哉

又かきよする浪の藻くつは

嘉永二年つちのとの酉十二月

大隅垂水のさと

伊集院兼愷書す

すさひ草後編

目録

| | | |
|-----|-----|----------|
| 卷之一 | 春之部 | 二百六十七首 |
| 卷之二 | 夏之部 | 百七十三首 |
| 卷之三 | 秋之部 | 二百五十五首 |
| 卷之四 | 冬之部 | 百七十六首 |
| 卷之五 | 戀之部 | 二百四十四首 |
| 卷之六 | 雑之部 | 五百四十二首 |
| 卷之七 | 文之部 | 十五首 |
| 惣合 | | 一千六百七十二首 |

┌
(ウ)

┌
(2・オ)

┌
(ウ)

┌
(3・オ)

翻 刻

すさひ草 後 編

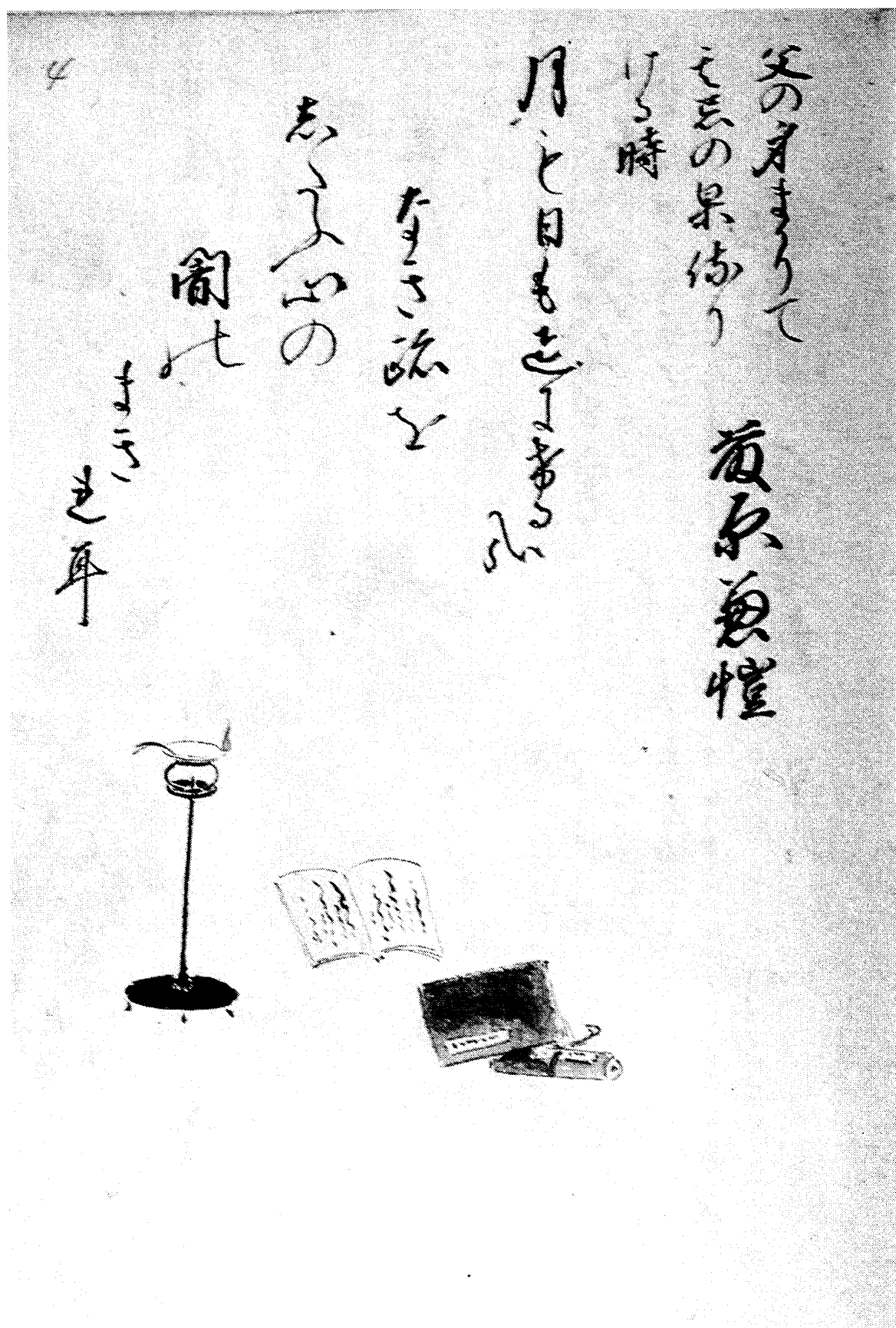
凡 例

- (1) 仮名を現行の平仮名に改めたが、漢字はなるべく原の字体を残した。改行の具合も原本の通りである。
- (2) 仮名遣いも原本の通りである。
- (3) 和歌には通し番号を付けた。又、長点は傍線で示した。
- (4) 欄外に記された感想は、(一)を付けて、詞書きの行に移した。
- (5) 訂正にはどの付いているものと、付いていないものがある。訂正された表現は、本文の右に細字で示した。ミセケチ記号とは本文の左に記した。
- (6) 詞書きなどには、読解の便などの為に一字空けたところがある。又、詞書きに和歌めいた表現が出て来る場合も一字空けた。
- (7) 虫損の箇所でも、明白に文字が推測出来る場合はその文字を示した。しかし、判読不可能の場合は□□で示した。
- (8) 丁付けは、^(1・オ)(1・ウ)のようにして示した。
- (9) 空白部の広さは、必ずしも原本の広さを反映するものとはなっていない。

此すさひ草卷々の中に長点を引たる歌爰かしこ
にましれり こは数々の中より折ふしことにかれこれ
えり出して

飛鳥井雅光卿の御もとにさ、け奉り
卿の御点をくはへ給へりしを 其ま、写し置るに
なん いさ、かも他の人のわさにはあらずと云事を爰に
しるす

藤原兼愷



(「垂城三十六歌撰」から伊集院兼愷)

東の草 後編 卷之一

春の部

立春

朝日新るばるの光景にそそぐためやまぬまらぬ
ゆく年をよめみゆるて天の光のまきまきとははるむん
高城住者は百を計りける時同くを

照る日の光るにまきまきのまにわらく神はまきま
立春天

かみしももきける日のおれまよりわくまきまを
月も日もいよめみゆるてゆく年の同くあまのまきのまき
立春風

雪少くはるのまきまのまきまのまきまのまきま
百首をよめける中へ立春霞

矢始鳴弦之伝も受けた。

天保六年十二月に『浪之藻屑』の編集が終わった。兼愷四十九歳の時の仕事であった。貴典は時服を下賜して、その労をねぎらっている。翌年、『浪之藻屑』は（添削を乞うて）飛鳥井雅光に献じられた。四月には、雅光が『和歌三代集』や『句題口伝』等を兼愷に与えている。兼愷は、十九年前の文化十三年七月から雅光に盟詞を献じて、門人となっていた。

領主が代わる度に諸士の武芸を上覧するのが垂水邑の例であった。天保八年三月、貴典が上覧するに当たって、従来の砲術や天流兵法の外、兼愷が指導している馬術も演じるようにという命令があった。二十六日、兼愷は厩に馬場を調べ、初めて馬術を披露した。貴典は金百疋を与えて賞し、兼愷は酒肴をもって君恩に謝した。九年九月三日、田中清右衛門綱繩に甲州流軍法の奥儀火星之伝を受けた。この月、佐土原侯島津忠徹が霧島の温泉を経て、鹿兒島入りした。貴典は鹿兒島の第に忠徹を招いた。佐土原侯は、初代久信の祖父以久に始まるので、垂水とは同族であった。家老の兼愷は忠徹に拝謁し、杯を与えられた。十月九日には、東郷実門から日置流の弓目録と矢絨等の相伝を受けている。十一年十一月には飛鳥井雅光から豊岡大蔵卿治資の描いた絵二枚が送られた。

六十八歳の嘉永七（一八五四）年九月一日、東郷左太夫実教に射術の奥儀を受けた。十月十二日、妻に先立たれた。そして翌安政二年正月十二日、妻の後を追うように卒した。法号は潜龍である。

六十九年の、見事に垂水の文武両面の牽引車を務めた生涯であった。

ていることに気付いたので、それで紹介しよう。

兼愷は、右衛門佐久昌の子孫で、久昌の子伊賀守久実から数えて十代目に当たる。父は善之丞兼貞（入道清遊）、母は伊地知季昵の女であった。天明七（一七八七）年七月二十五日の生まれとなっている。数え歳九歳の寛政七（一七九五）年、元服の式が行われた。加冠は第七代垂水領主貴澄、理髪は江藤為庸であった。この日、貴澄から八之丞の名を与えられた。この日と翌日には、その御札の持て成しなどが行われている。十四歳の享和元（一八〇一）年十月には御小姓となった。十二月二十八日には名乗りを吉左衛門に改めている。

二十一歳になった文化四（一八〇七）年三月五日、貴澄が卒した。正月十七日、第八代貴品に命じられて、貴澄の遺髪を高野山建靈院に納め、石塔や神牌を蓮金院に置いて、法事を修して来ることとなった。見樹院僧長順が遺髪を護り、兼愷は宮原源左衛門景雄、足軽岩元七平と二十八日に立ち、三月四日高野山に着いた。九日には高野山を立ち、伊勢廻りで京に上り、伏見で客死した第四代久治の眠る月橋院を訪い、神牌や灰塚に参拝した。そして、五月一日に帰国している。二十三歳の六年六月二十六日には近習役に、更に九月十三日には与頭になった。翌七年十二月二十四日には御家老座で知政事を習うように命じられた。その翌八年十二月十五日、二十五歳の兼愷は御家老並となり、家老の任務を行うこととなった。十三年二月一日、東福寺城の別業で門外に列して太守斉興を拝賀した。この年の末に兼愷は伊地知季顕に学んでいた天流の兵法を

惣伝した。但し、師季顕は既に没し、後継者は未だ幼かったので、後見役の季虔から實際は受けたのであった。

三十二歳の文政元（一八一八）年二月十五日、貴明（第九代貴柄）が鹿兒島で斉興に拝謁し、家督を継いだ旨の札を述べた。その席に六人の家臣が従った。兼愷は父の兼貞が病氣であった為に、その代わりとして加えられたのであった。二十一日には遂に家を継ぐことになった。

翌二年四月八日、家老見習いとなり、三年二月十七日、正式の家老となった。三十四歳であった。二十八日に、貴明・貴典の主君父子に、家督を許されたことと家老に任じられたことの御札を献じている。猶、この日貴明への奏者を務めた梅本実有は岳父である。

さて、公務の暇に兼愷は鹿兒島の本田親長に就いて、池坊の活花を学んでいたが、四年十月にはその花道の惣伝も受けた。又、六年には田中綱紀に甲州流軍法打太鼓之伝を受け、同じ年の八月二日には、父も習っていた神当流馬術の師比志島範□に、隠退した父兼貞に代わって馬術が盛んになるよう教導することを命じられた。

十二年六月十二日、四十三歳の兼愷は八兵衛と改名した。八兵衛は父も名乗った名前である。天保二（一八三一）年八月十五日、第十代貴典が鹿兒島で斉興に拝謁し、家督を継いだ旨の札を述べた。兼愷は今回は正式の随謁家臣六名の一人であった。翌年四月、御近習役安山親敬、梅本実如を介して、邑中の士に馬術を学ばせるようにという貴柄・貴典主君父子の命が伝えられた。五年十一月十六日には本田実徳に日置流射術

垂水の文学（五）

『すさひ草 後編』 第一冊（垂水市教育委員会蔵）

— 南九州の国文学関係資料（二十三） —

橋 口 晋 作

福 井 迪 子

前号に伊集院兼愷の私家集『すさひ草』（零本）を翻刻して紹介したが、今回ここに翻刻しようとしているのは、作者兼愷が、それから十三年後の嘉永二（一八四九）年にその「後編」として纏めた私家集二冊の第一冊である（兼愷は「その後はた年餘りの月日をへて」と「後編序」に記しているが）。この第一冊の書誌は、

半紙本の写本、二冊本の第一冊。縦二三・〇糎×横一六・四糎。表紙、裏表紙とも新装。一丁のウラから六十六丁のオモテまで墨付き。虫損の為、六十六丁全て裏打ちされている。袋綴。歌は一行書きで、詞書きは二、三字下げ（写真参照）。みせ消ち、訂正などが相当にある（みせ消ち記号は、『すさひ草』では種々だったが、「後編」では「ヒ」だけとなっている）。又、歌には飛鳥井雅光による「長点」が付けられている外、上欄外に感想もいくつか記されている（一ウ参照）。一面は原則として十三行。一丁の自序、半丁の目録が付い

ている。歌集本文は巻ごとに改訂されている。
の通りである。

『すさひ草』では、飛鳥井雅光から与えられた題について詠んだ歌の外に、垂水や鹿児島の子の歌会の席で詠んだ歌、旅行中の歌など、詠んだ場が種々であったが、この「後編」では、飛鳥井家の月次会のもの外は、高城住吉社・飛岡天神宮への奉納歌、兼愷の「あやめ田の山莊」で詠まれたもの、主君島津貴典に關係するものと、その場が随分狭くなっている（旅行や歌詠みの家に行つての詠が少なくなったのは、老齡になつたからであろうか）。しかし、『すさひ草』では出て来なかつた「あやめ田の山莊」は、兼愷自身にとつても和歌の生まれる場であつたが、貴典公を始めとする風雅の士の社交の場（和歌の会の例会場）となつてゐる観がある。兼愷は「あやめ田の山莊」を得て、風雅の士を訪う客の立場よりも、彼等を迎える主の場に立つことが多くなつてしまつた様だ。このように詠歌（の機会）が型に嵌つて来ると、題詠ということもあり、和歌そのものも変化に乏しいものになつてしまおう（古典和歌そのものが変化を貴ぶものでもないが）。欄外に「重出」と記された和歌は「すさひ草」との重出歌である。歌題を見ると、629が同じ「月前竹」、717が「夜時雨」と「時雨」という具合であるが、つい以前の和歌と同じ表現になつてしまふということも生じるのである。

さて、兼愷の略伝は『松操和歌集』に記してあるが、垂水市教育委員会蔵の『諸家系譜留』（虫損がかなりある）にもっと詳しい経歴が載つ